

忠臣金短冊

忠臣金短冊

序 詞

作者
並木宗助
小川丈助
安田蛙文

忠功は是禮の餘り。武勇は是義の餘り。其餘り滿々として。天にはびこる高名をなす。されば松柏は雪中に某操をあらはし。忠臣は亂邦に其徳をかゞやかし。よく忍びよくむくい。あら炭をのみ戸を。むちうちちの代の昔をば。爰にたぐへし言種や。後花園の院。御代しろしめす比かとよ。足利左金吾源の政知朝臣。關八州の政務とて。ヲロシ鎌倉にこそおはしけれ。地兄將軍義政公に相も劣らぬ御威勢。帝のめぐみあつくして勅使下向と聞ゆれば。大老佐々木將監友秀。横山郡司信久。諸士の中にも土川兵庫國高。其外在鎌倉の大小名。柳の間に召寄給ひ。勅使のもてなし應對の式。古格古例を合引せ。フシおのゝ役々評定ある。地政知仰出さるゝは。詞此度一條の大納言勅使に立せ給ふ事。關東靜謐を御賞美との事なれば。奏答の大禮。殊更もてなし重からずんばあるべからず。先佐々木將監は古老の臣。某が後見たるべし。又横山郡司信久は。職原故實の家筋なれば。勅使への取次馳走陪膳等に至る迄。地汝宜く沙汰せよと左右へ仰有ければ。佐々木將監頭をさげ。詞大役ながら此節に辭退申は却て無禮。地畏入候と申上れば横山郡司。我役義こそ諸士よりも賂を取るよき役と。心悅びそれとなく是も仰を領掌す。詞政知重て。詞外に馳走の添人。

誰々にやいひ付んと。地仰もあへぬに横山郡司。詞憚ながら都人の馳走役。風流なくて。然るべからず。殊に勅使は十柱香をこのませ給ふ由。幸是成土川兵庫。常に名香をよくきゝ覺候へば。勅使へのもてなしに此仁宜く候はんと。地おのがひいきの取持に付てさへづる土川兵庫。すゝみ出て畏り。詞事いかめしき言上ながら。かやうの事の折にも。名香數百種用意あり。地相應の役目の義仰付けられ下されと。願へば政知。詞ヲ、幸々さりながら。勅使大納言。殊更風雅の達人なれば。歌の道に心ある武士今一人相加へ。共にもてなし然るべし。ホ、ヲ思ひ付たり。小栗判官兼氏は。かねて歌道をまなぶ由。土川が相役には小栗こそよかれと。地仰もあへぬに横山信久。御上意にて候へども。詞和歌をまなぶは日本のならひ。水にすむ蛙。花に休らふ鶯まで。歌をよむと承る。いはんや人間として心に思ふ言の葉を。三十一字につらねよむ事。地誰かはしらて有べきか。詞コレサ土川殿。御邊も定て歌の道。まなばれたであらうがのと。地いへ共しらぬ顔付を。詞イヤテ是さ。卑下めさるゝは頼もしい。殊更此横山が何事も助あひ。萬事計らひ申べし。小栗判官兼氏は今日の御召にも。いまだまあらぬぶしつけ者。かやうの旅を馳走役旁以て御無用と。地正直風雅の兼氏を我貪欲のさまたげと。フシ口に任ていひけがす。地折から告る取次番御前に畏り。詞小栗判官兼氏がやうく只今參上と申上れば政知朝臣。先召寄て兼氏が意内をうかじひ兎もかくも。それくとの給へば。やがてかくとぞ聞傳へ。地あゆみ出でくる男ぶりやさかたにして針も有。小栗判官兼氏。香木一株を臺にすへ。郎等大驚傳五に持せ。參上の程延引と。フシおそれ入てぞ畏る。政知御覽じ。詞ヤア兼氏。今日の遅參いか成故ぞとの給へば。御尤の御尋。今朝未明に出仕と存。すでに出立候所。拙者國家老犬岸由良之助より。飛脚到來仕り。國元の盃をとめ香木をかつぎ上げ。薪に致し候かほり。近郷にみちく。それより犬岸が方へ引取。我君へよき献上と持せし候故。よくく改候に。まなばんの沈木香に疑ひなく候ま。君に差上申さんとやかく致し出仕延引。地それくと有ければつとこたへて大驚傳五。フシ御前になほして引さがる。地政知。おのく御覽有れ。誠にふし

ぎの香木と。暫らくながめおはします。横山郡司むつと顔いひおさへんとつと出。詞最前も御聞の通り。名香は數百種。土川所持し申さるゝ。只今小栗沈水香と申さるゝは。世にたくさん成沈水の事。それを何ぞや名香として勅使へ馳走は却て無禮。地御戻し然るべしといふに強氣の大驚傳五。こらへぬ風情を小栗判官。にらみ押さへ。色を正し。詞コレ。横山殿。成程沈水香は沈水の義。一片を價千貫にて求る由是本草の説なれば。沈水則きやらの事。今世に申沈水は密香と申物。それ故誠のせつを以てきやらを沈香と申上しを。たくさん成物ぞとは近比故實を覺たる。横山殿とも覺ずと。地理を明らかに答へられさすの横山ぎつくりと。かへす詞もなげ首を。大驚傳五心地よくつくつと吹出し。詞ア、おかしや。扱もつまつたあの顔はいの。かきも構はぬ献上ものを惡様にいふ詞の針。其口ぬふておかしやませ。地しりもむすばぬいとしやとフシ腹をかへてわらふにぞ。地横山方の土川兵庫ヤア大驚。地下として上をあぎける慮外者。汝ごときがしる事ならず。ノウ小栗。千も萬もないあの香木。いか程。すぐれても某が所持したる。梅檀といふ名香には申々以て及ぶまい。今双方たきくらべ。その香をとりてまけたる方は。献上無用と定むべし。此了間はいかに。ヲ、それこそ此方望所。地いで。用意さあく。と。小栗は香木申受。フシおの。香爐を取よする。地政知興に入らせ給ひ。先土川が梅檀を。禮式畧義に引よせ給ひ。げにも二葉の名にしおひかんばしやとて賞美有る。地又兼氏が沈水木早さし上る其内より。たへなるかほり四方にみち身心清まる心地して。政知かんしん斜ならず。詞扱々天晴なる香木。たとへ關奢侈を身に帶て。芝蘭の室に入ととも。地是にはいかでまさるべき。詞今よりは此香を海士のたきさしと銘じ。地勅使へもてなし献上せんと。香爐を傳五に給はれば。小栗は面目有がたく横山土川顔見合せ。ほいなき體を大驚傳五。詞コレ土川殿。海士のたきさしといふ名香。念の爲に此すがり。まだふんゝをかゞしやませ。いやなら我らかぎませう。地扱よい匂ひとあて付て。フシ衣裳にとめ木をなしける。地横山郡司何をがな恥あたへんと聲を上。詞何れもあれ聞しめせ。小栗判官共いはるゝ人の郎等が。伽羅をかぐ

といふ無骨者有。惣じてはひはきくこそいふべけれ。ノウ小栗殿。かくと申むさい詞。地なんぞ書物にござるか
 とあざけりかへせば取敢ず。詞五月まつ花橘の香をかげば。昔の人の袖のかぞする。古今集の歌にさへ香をかげば
 地かげばとよんで候を横山殿はしりながら。心を引て見給ふかとフシさはらぬ様にこたへある。地横山ぜひなくうな
 ずいてたはふれに取なせば。政知朝臣歌學をかんじ小栗判官をちかく召れ。詞此度勅使をもてなすに。將監は某が
 後見。横山は取次萬事さたすべし。猶土川と其方は馳走の添人。取次應對は横山にうかどふべし。大切の役目必そ
 こつすべからずと。地君命つねよりおもくしてはつと計に領掌有り。おのゝ役義定りて申合せは重てと。はや退
 出の横山に。袖の下する土川も。小栗をにくみ諸共に。身をはたすとは白眞弓やかたにおのゝ。三更かへらるゝ
 フシ都の花の片枝を。地爰にうつしてあづま路や。鎌倉の政務職政知公の濱御所には。勅使一條大納言教房卿の御入
 にて。在鎌倉の諸大名善つくし美つくして。フシきらをかざりし其中に地横山郡司信久は。職原の事知とて。諸禮を
 諸士に指揮せよと。仰を受けて鼻高く。人を見くだす邪智かうまん。家來山形兵衛を召具し。きたいの惡馬鬼鹿毛を。
 フシ跡に引して來りしが。地山形兵衛横山が袖をひかへて申旦那。調道すがらの御意を聞に。鬼かけを御勅使へ御獻
 上との御事。武勇はげしきものゝふさへ。驅惱されくひつかれ。是迄命をおとせし者。此馬にて數百人。地かゝる惡
 馬を獻上なされ長袖の教房卿。後日あやまちに候はゞ却て御ためによろしかるまじ。御賢慮いかゞと尋れば。詞され
 ば。今年の御勅使は限もない馬ずき。あなたへ上るにあらね共。定て今日小栗めに曲馬の御所望有るは必定。其
 時此惡馬をあてがひ。くひ殺させて腹ふんと。地いへば山形手を打て天晴なる御分別。始めてやしきへ參るじぶんも。
 詞土川殿は種々の進物。小栗めは扇子箱。欲徳よりも輕しめたるしかた。地鬼かけて返禮とはどうやら今から快い。
 隨分とぬかり給ふな。詞ヲ、氣遣ひすな。よくして見せん。地此方から呼出す迄しばらく木蔭につなぎおけ。心得申
 候と山形兵衛家來にひかせ馬の供。横山は御門の内。フシ主従わかれ入にけり。地姿形はかはらねど。善と惡とは雪

と墨。政知公の御後見。智勇をかねし大老役佐々木將監友秀。ゆうくんと立出給へば。参りかゝりに横山軍司。詞彌
 勅使は御きげんよく。御わたり候やと式禮すれば。成程々々。相替らず御安座。夫に付今日の献上物はいまだ上ら
 ず。地はやく申付られよと。仰に横山さん候。詞饗應の役人共。土川小栗に申付。追付持参候べし。地遅滞の間御前
 の取なし。頼上奉ると頭をさぐればいかにもく。兩人が見へ次第。早速に差上られて然るべし。後刻々と友秀
 は。殿中へ。ふかく入給ふ。程なく土川國高は進物折を臺にすへ。心の程は見えぬ共。なりかつかうは大名ふう。い
 かめしげに立出れば。横山待かね。詞何土川殿。小栗方へは何時に。進物上げよといひ合されし。刻限が聞たしく。
 さん候御おしへのごとく午の刻と申送り。二時計いひのばし。地ゆだん致させ候と。いふにうなづき。詞出来たしく。
 今にもきやつが来りなば。急に進物上よとの仰によつて差上しと。ともくにせりためされよ。地何でもうせたら
 とちめんぼう。よい慰みて有べしと。フシさゝやき悦ぶ折からに。フシ小栗判官兼氏は。内にたくはふ文の道おもて
 に武道を。立まぼし。さばうの装束ゆゝしげに。地家來を外にやすらはせ。御門前より只一人何心なく大廣間。あし
 やくして座になほり。詞土川殿御出勤。さそひ合せて参らう物。地残念至極と有ければ。横山わざと面をやはらげ。
 詞小栗殿。今日の献上物は御持参か。地はや出されよとせり立れば。兼氏は少しもさがらず。詞今日の進物は午の刻と
 承り。其旨急度申付。跡より家來が持参の筈と。地挨拶あれば横山は。氣色をそんじ聲をあらゝげ。詞午の刻の進
 物を卯の刻から持参あれば。何ぞ御損が参るかな。延びする貴邊の心は。差上いても事すむならずまさんとの勘定つ
 く。公の法例をみだりに破るは。ヲ、道理く。かた田舎に小城を持。田夫野人にそだてし故。何もよいことし
 らぬ筈。隙入ては御きげんいかゞ。どれ土川殿御進物。貴殿の方から差上ん。ハテていねいに見事く。地さぞ勅使に
 も御満足。御前の首尾は受取たと。入らんとするを兼氏は。横山をしばしと呼びとめ。地同じ役義を蒙りながら。土
 川殿の進物と刻限相違はいかゞなり。地今しばし御ひかへ下さるべしと有ければ。横山は付上り。詞こなたの首尾が

わるいとて。某は何共存せぬ。おためを存此方が越度に成事得いたすまいとフシ座敷を蹴立入にけり。地主方はし
 たり顔小栗のかたへは目もやらず。そらうそふいたる有様に。たんりよの兼氏横山が詞は無念に餘れ共。じつと押へ
 て是土川殿。詞御いそぎの進物ならば。そと御しらせも下さるべきに。地お心づよしとの給へば土川はせむら笑ひ。
 詞ハレうろたへたる恨口上。高いは所領畢は知行。將軍より頂戴し。勅使への進物も皆君への御奉公。自分々々
 の奉公を何の人にとい合せ。忠義手柄はめんくしがち。元ゆだんからおこる事。地重て心得めされよと。打込詞に
 判官は猶腹立のかさなれど。所といひ折わるしと。胸押しづめおはすれど。怒は面にあはられて顔はあかねに染たる
 ごとく。せきにせいておはする所へ。小栗の郎等原郷右衛門定時は。進物の巻絹を白木の臺にうづ高く。つみ上て兩
 手にさゝげ。大小りつばさつぱりと。大口仕立の上下も場の有男一ひれは。さすが小栗の執權とフシいはねどしらす
 に入來り。地すぐに座敷へ通りしが。兼氏氣をせき。詞ヤア郷右衛門。何として遅なはりし。地是へ渡せと立給ふ顔
 色も只ならねば。常のたんきの氣遣ひさ心ならず畏り。詞進物延引仕り御首尾あしくばいひわけ致さん。隨て屋
 敷にて某が申せしごとく。申コレ殿。御たんりよを出し給ふな。千鈞の弩は。雞鼠のために其機をはなたずとの先
 言。千挺ならべし弩は。雞鼠を的には致さず。侍もまづ其ごとく。腰ぬけなんどは相手に不足。大丈夫たるも
 のふをは。聊の義を恥とせず。地忠義を守るが誠の勇者。もし此心を取ちがへ御鷹相など足あらば。今迄みぢん
 疵もなき小栗の家の瑕瑾と成り。先祖代々へ御不孝。必々。ナ。小人の無禮を耳にかけられなと。失禮不道の横山
 と兼て惡意の土川を。尻目にかけても聞ぬ體。小栗は何の返答なく用あらばよび出さん。御臺所にひかへよと。仰を
 そむかずハはつと。しづく立て入けるが跡に心の残りしは。フシ後にぞ思ひやられける。兼氏えもんも進物も取締
 ふておはする所へ。横山郡司すましがほに立出。詞擬々土川殿。御前の首尾は益。ヤア兼氏殿。時はづれの進物は
 參つたか。地見分せんどれくと立寄て。詞コリヤなんじや。コレ御らんあれ土川殿。堺純子のべらく織物。是か

勅使へ上らる物か。しかへられよと地突飛せば。いか成事共白木の臺左右の足を押をれば。くはつとせき上小栗判官
 詞ヤア無禮なり横山。進物倉相に見ゆるなら。改なほすてすむべき事。最前よりの惡言過言場所を思ふて堪忍する。
 地以後をたしなみ召れよと色を正してきめ給へば。横山もいひがかり。詞是式の事何の無禮。見分の役を受。惡敷を
 惡敷といふが無禮か。以後たしなめとは存外至極。たしなむまひが何とする。くづれし進物披露して。勝手がよくば
 持ゆかんと。地損ぜし進物其儘にとらんとするを小栗判官。堪兼てぶこつの横山。思ひしれと拔討に。まつかう切こ
 むちいさ刀。土川すかさず立上り。兼氏をだき留れば。切れた横山はつと敗亡。はなせならぬと兩人がせちがふ間に
 信久は。蛇の口のがれし心地してフシこけつ轉びつにげ入たり。地力まさりの判官兼氏。土川をふりはなしいづく迄
 もと追かけ給へば。させぬくと土川も跡についてかけ込だり。そりやけんくわよと御所の騒動。どう坊茶道小姓
 迄うるたへ眼に走り違ひ。御門をうてよと聲々にのしりわめけど門前にも。諸大名の供廻り。けんくわの相手はし
 れね共。面々主人の身のうへ氣遣ひ。大下馬さきのもやくやは。富士野の鹿が一時に狩出されたるへごとくなり。
 地表の方をしづめんと佐々木將監友秀。廣間口にかけ出給ひ。詞ヤア門前のめんく。けんくわの相手は小栗判
 官。横山に意趣有由にて切かけしが。早速に土川兵庫。後より判官をいだきとめ。地双方共に死傷に及ばず。殿中は
 をさまつたり。表のさうどうしずまれよと言捨て入給へば。皆々安堵の思ひをなし。よその事ならかまはぬと。フシす
 こしはしづまりぬ。地かくと聞より郷右衛門臺所より一さんに。大廣間にかけて上り奥を見やれば諸大名。立違ひ行違
 ひざはめく體は猶氣遣ひ。様子を見たくは思へ共奥には勅使も政知も。御着座まします事なれば。ふんごんでは後日
 のとがめ。主君の爲もよからずと工夫をこらしてゐたりしが思ひ定て袴のもうだちかけ入らんとする奥よりも。行儀
 正しく三方にのせて出たる腹切刀。ふしん晴ねば郷右衛門。ためらふ所へ兼氏は。以前にかはる御有様。ゑぼしもと
 れてしほくと立出給ふを郷右衛門。見るよりハツト氣も狂亂。扱は切腹なさるゝかと立寄を太刀取檢使押へだつ。

佐々木將監ささきまさのりおくりより立出聲たちでせこゑをかけ。詞小栗判官兼氏ことあぐりはんけんし私の意趣いそを以て。横山郡司よこやまぐんじに切付し狼藉ろうしやく。勅使ちくしのお入をわきま
 へぬ慮外りょがい。さるによつて所をさらず切腹せつぷくとの上意じやういなり。いふことあらばそれから申せ。近よる事は叶かなはぬと。地せい
 せられて郷右衛門ごうゑもん。うろ／＼すれば兼氏は。わるびれもなくどつかと座し。詞ヤア見苦し郷右衛門ごうゑもん。最前汝が諫いさなの詞
 用ひざるにはあらね共。心外胸にせまりし故かく成は覺悟かくごのまへ。今さら驚く事ならず。地かみへ對して露程も御恨
 は残らね共。さいごの跡へ只一言いひおく事有つく聞け。詞さいつ比此役義を領掌りやうしやうしたる其砌。横山我に無禮むれいの
 難言なんげん。口惜くちやくとは思へ共。此度の大役を首尾よく勤奉るが。君への忠と了簡し。地今日に至つては再三さんさんの法外惡口。
 かんになせば腰ぬけと。武門に疵のつかん悲しさ。只一討と思ひしに。打物みじかく心はせく。土川兵庫にだき留ら
 れ。横山を討もらせし心の内の無念さは。骨肉にしみわたり億萬劫をふるとても。思ひ忘るゝ事はなし。地汝國元へ
 下りなば由良之助にしさいを語り。横山郡司にとどめをさゝて無念むねんなと。くれ／＼も傳へてくれ。いひ置ことは計。
 はや立歸れと事もなく。の給ふ聲も身もふるはせ。殘念見ゆる齒はきしみに。太刀取檢使も兼氏の心根を思ひやり。顔
 をそむけてはらくと。忍び涙にむせびけり。地郷右衛門は始終を聞。泣もなかなれず詞もしどろ。詞常の御短慮しり
 ながら。お傍につきそひ申さぬは。拙者めが誤り。とてもかく成事ならば。最前是にて猶豫の時。地無二無三に切入
 て。横山が首とらんず物。後日のおためを思ひ過し。助てかへす口惜や。詞無念にござろ我君。定時めが胸の内。御
 推量あそばせと。地拳をにぎり兩眼に。涙はしめ木でしめ出すごとく。膝につたふて三寶も。フシういて流るゝ斗な
 り。地兼氏座をしめ聲あら／＼げ。詞叶はぬ事をぐど／＼と繰言をいはず共。只今いひし詞を忘れず由良之助にいひ聞
 せよ。時刻うつらば小栗こそ最期にみれんを出せしと。地萬人の口にかけ。さみせられんも本意なしと。三寶取てい
 たゞき給へば涙ながらに太刀取は。心は辭退に思へ共上意は猶も默止されず。後へ廻れば郷右衛門。今しばらく御待
 と。いふ内にはやあへなくもフシ首は前へぞおちにける。地わつと計に定時は。人目も恥ず大聲上。前後忘れし男な

き。地見るに佐々木も太刀取も哀もよほす涙聲。詞兼氏のなきがらは其方へわたすべし。地心まかせに葬れとなくな
く立入て入給へば。走寄て尊骸を。押なほし抱きかゝへ變りてはたるお姿と。我を忘れて泣きけふ。フシ心ぞ思ひや
られたる。地誰かかくとは知らせけん小栗の家來大鷲傳五。ちうを飛んでかけ來り。御殿もひびくかみなり聲。詞主
人小栗判官は。横山郡司信久と口論と聞たる故。君の安否を聞ん爲。大鷲傳五忠光只一人かけ付たり。門をひらき給
はれとよばはる聲に郷右衛門。驚き廣間につゝ立ち。詞ヤアおそかりし傳五。貪欲さかんの横山信久。重々の慮外。
君御怒に堪兼て。情なや先手を出され横山は存命なれ共。時節所をわきまめぬ狼藉なりと只今。御切腹なされしと。
地聞て傳五は大いに仰天誠か實かと計にて。フシあきされ果て立たりしが。じだんだ踏で。コリヤ郷右衛門。詞汝は
それをうつかりと。見物して只居たか。なぜ切入て横山がしが首をとらざるぞと。地いらちに爆てば。詞ヲ、せく
は道理。我もさは思ひしかど。勅使にも政知公にも御入なされし御殿中。ためらふ内に此通りと。いふを聞ずよい手
な事いへ臆病者。地いて御主人へのとむらひに横山が切かけ首。引ぬいて見すべきぞしめた門を明てはもらはぬ。こ
つちから明て見せんと大下馬の道具留。六尺餘りのみかけ石。ゑいやうんとさし上るを。内には定時あぶくと。コリ
ヤく傳五あら氣は無用。かみへ對して少しでも狼藉といはれては本望の妨しづまれ止まれとあせれ共。イヤくそ
れはある昔。主なきからは破れかぶれとフシ又差上し折もをり。地横山が郎等山形兵衛家來を引つれどつと駈よせ。
詞身が旦那横山を討取んとはき出すは。小栗が郎等大鷲よな。爪のながい望事。地命のねぐさる因果の主従。小栗か
めいどの供させよと。ひしめけば大鷲傳五けらくとあせ笑ひ。詞やれく相手はしう思ひしに。横山が家來となど
りや暇とらせんと。地持たる大石なげ付れば。さきにすゝみし難人ばら。ぎやつと計に一ひしぎ。残るやつばら是り
やゆるせと。かいふつて逃ゆくをフシのがさぬやらぬと追かけゆく。地郷右衛門は兩手を上。やれ追かけな最うよい
は。たんのうせい大鷲と。かけ出んにも御門はしまる。堀越に呼かへしもどれくと氣をせく折しも。おくよりかけ

出る使番。詞兼氏が家来原郷右衛門は汝よな。政知の御前にて。仰付らるゝしさい有。地龍出よと在ければ。畏り
 奉ると入らんとすれど外も氣遣ひ。とやせんかくやと行きつ戻りつ。なんぎは二つ身は一つ。参れ／＼と急のお召
 ぜひなく御前へ出にけり。地表には大驚傳五敵を四方に追ちらし。取てかへして隙間もあらは横山を討とらんと。
 御前にたゞすみうかどへば。又山形が追取まき。詞あいつはどうで人手にかなはぬ。小栗めを喰殺せんとひかせ置
 たる鬼鹿毛を切てはなせと下知すれば。地畏つたと家来共てん手にわり竹たゞき立。えい／＼わつとおめく聲。大
 驚さわがず尻打たゞき。詞鬼鹿毛とはよいなぐさみ主人小栗は基盤の曲乗。此傳五は將基だふし。地馬人共にいけて
 はもどさぬ。鬼でもござれ象でもござれと。フシ大手をひろげ待かくれば。地暴にあれたる荒馬の。すなを蹴立て高
 いなゞき。齒をむき出しとび付を。二三べん身をはし。ずつと寄て大驚が。つかみ付たる羽がいじめ。コリヤ／＼
 くと聲かけて。押戻したる大力。こんがう力士にさしもの馬。たぢ／＼と跡じさり。地まかせておけと突放せ
 ば。身ぶるひして蹴上り。一さんにかけ行くを。よい乗替と大驚が。跡をしだふて三更追て行。地横山が雜人原。主
 の馬を取にがし。いひわけなしと血眼にてそこよ。爰よと尋る所へ。大驚傳五は鹿鬼毛を。なんなく組留め乗鞍の。
 かけて有のは仕合と。かざりを切て手綱にかけ。あふり立て乗戻れば。詞そりやこそ馬はあつちのもの。青二めが味
 やつた。あざむいても最うたまらぬ。地馬くづしに崩されなとフシさんこ亂して逃散たり。地大驚あぶみ踏そらし。
 ヤアはた／＼めらもらつた馬の蹄にかけんと。のり出す所を郷右衛門。上の仰をうけながしかけ出て聲をかけ。詞ヤ
 レまで傳五代々殿の頂戴なされし。扇がやつ御屋敷を。取上るとの御上意御領地とても心元なし。其馬こそ幸ひ幸
 ひ。汝は國元へのはや打由良の助にいひ聞せよ。地我は君の御死骸ふぢさは寺にをさめおき。跡より追付くだるべ
 し。はや／＼いそげとせり立れば。つのをも引さく大驚が。君の死骸と聞からに。力もがつくり心もをれ。然らば是
 よりかけ出さんせめての事に我君へ。おいとまごひと望むにぞ。心得たりと判官の。御首を定時がいだき上てのしや

くり泣。そこには見上て大驚が。勇氣にかくせしたため涙。流れかゝつて鬼鹿毛の。フシ尾髪もぬるゝ計なり。なげくは愚痴と互に恥あひ。主君のしゆらの怒をやすめ此うつふんをはらさん事。皆我々が手裡にあり。力を落すな合點がてん。敵のかたより此馬をえたりかしこし。本望を。遂べき瑞相相州をたそがれ時にうつ立て。故郷にかへる駒のあし。千里を走るいきほひに鞭をそへつゝ立別れ本國。さしてぞくだりける。

第二

地尊きは門より見へて賑しく。登しき門は表から住む甲斐もなき志賀の里。松本村に屋羽からしむ浪人は去年の春。切腹有し小栗の御内七右衛門といふ足輕の。寺澤名字打けてたばこ切して小あきなひ。立る煙の便にと。フシ身を粉にきざむ計なり。地貧しき中に七右衛門食事も通らず病苦しみ。けふを限と見へければ。命こひとて女房がお多賀参りの留守の内。地娘のおやつ十八の盛の花もしほくと。一間の口に立よりて。詞申とゞ様。五七日はお食もあがらず。お口に合物拵へん。お好みあれと枕もと。押明れば七右衛門おもき體をやう／＼おき。詞娘か。フ、よう間ふてたもる。食事もなんにも望はない。今一度ほんふくと願へ共もう叶はぬ。とゞが死だら母に随分孝行つくし。大切にしていたもや。ひよんな病ひに病付た。といふも弱らしいき遣ひ。娘はかなしく其様にあぢきないと思はず共。薬をのんで本腹して下さんせと。涙ぐめば。イヤ／＼。詞薬をあびても最うなをらぬ其譯は。朝鮮の大人参。五兩か七兩。用ひでは。本復はないとお醫者殿の仰。やすう取て二十兩の人参代。地家財着類を賣しろなしても。わづか二貫か三貫たらず。とても及ばぬ命乞。詞かゝがお多賀参りの下向はまだか。湯てもわかつて待ていや。地はやうお迎ひござれかしなむあみだ佛と障子をば。さす手もねぶつの聲斗。又も枕によりそひぬ。あるじの妻は未明よりお多賀参りと偽りて。人参代の拵に鏡の宿迄ゆきけるが。首尾調ふてかへる足。いさみもやらず打しはれ。門の戸明て戻

るとはや。娘は待かねノウカ、様お歸りか。詞今も今と、様の氣よはい仰。心ほそくいかう案じて居ました。マア問
 ませう私が事。相談成てお歸りが。打しほれたるお姿は心元ない聞たいと。地氣をせく娘の顔を見て。母は猶しも聲
 ふるひ。詞そなたの其志私が身にとり嬉しいやら悲しいやら。改いふには及ばね共。先夫太田武太夫殿に見捨ら
 れ。路頭にたゝんとせし折から。殿様の仰を以て今の七右衛門殿と女夫になり。地二人を是迄養育有し親なれば。
 此度の病氣人參代に身を賣て。本復がさせたいとそなたがいやるを幸に。詞此里の鏡の宿井づゝやへ相談したれ
 ば。廿兩といふ大金は出しにくいといふ。ソレおとゝ連立て來た若人は。京の島原の傾城屋。様子を聞いていとし
 事じや。廿兩で抱ふといふ。地所はなれた事ながらなさけらしい親方。談合しめて金受取。親仁殿の本復の妙薬は調
 ふたが。そなたの病のたね拵へ。おりや嬉しうて悲しうて。胸が裂るとなて下し。語れば娘も悲しさを。押かくし
 て。詞ハテ申何お歎き。かう申せばいな物ながら。小栗様の御内でも足輕づれの娘。勤に出たとて先祖をけがす程に
 もなし。と、様の本復有り。御出世の有付も有たらば。つい受出して下さんせ。貧いくらしをせうよりもわしや奉公
 が嬉しいと。かた目で笑ひ片目には。涙をつゝ孝行は。こがねの釜やほり出さん。地娘の詞に母親も引立て
 詞ヲ、さう思ふてたもれば千倍。さりながら病ほうけても七兵衛門殿は武士かた氣。地それと聞ても悟つても我子の
 肉は喰はずと。古文眞寶聞も邪魔。悟られぬやうまあ奥で。いやる事もいふ事も。拵事もしませうと。身のしろ金
 を娘に見せ。大事の物と半櫃の。フシ内に納て入にけり。地暫く有て一間の内病にふしたる七右衛門。頭を上てあた
 りを見。そつとおき立出る姿。ねやの内にて拵へしか。股引きやはん旅出立。半死半生引かへて。強氣樂調顔色も常
 より急度半櫃を。眼角に立て差足し。そろりゝと歩みより。くだんの金を盗出し眞懷にしつかと納。わらちの紐を
 結ぶ間も。心せき立後から妻と娘が差のぞき。うかゞひ居るとは夢にもしらず。門の戸引あけ出る所を。是待たと女
 房娘のとび出て兩手に取付ば。ハツト氣上り七右衛門弓手馬手へ拂ひのけ。又かけ出るを母は裾。娘は袖に取すがる。

ふりはなせ共藤かつら。つながれまといしがみ付。夫をなんなく下へ引すへ。せきにせいたる妻の泣聲。詞へエ、爰
な大がたり。きのふ迄も今日迄も。湯水も通らぬ病人と。思ひの外成此姿。地外のかねても有事か。娘を賣た身の代
を。盗取てかけ落とは。あいた口もふさがらぬ。詞其工とは知らいての。人參もつて本復あればよいが。もしや又な
い命なら。臨終の苦痛にもならうかと。地鬼の様なこなたをばかひこの蟲をかふ様に。大事がつたがむやくしい。
詞サア盗みやつた金戻しや。娘が身賣返がへする。地戻しやらぬかと胸づくし。取て引よせ引たをし。男ぢくしやう
大猫めと。つかみ付かみついて。恨悔めと返答を。何といふべき様もなく。フシさうつふいて居たりける。地娘の
やつは母おやの。恨にまさる腹立も。口へ出されず涙ぐみ。詞貧は諸道の。妨と世のことわざに聞けるが。殿の紋付
長羽織刀も腰に指た身が。地いかなる天魔が入替りさもししい心が出るぞ。自眞實血をわけし娘とおぼし給ふな
ら。たとへ其金湯に成共。命のかはりになる外は。遣ひ様も有まじきに。何國へ行て誰をまあ。はごくむ價にし給ふ
ぞ。此身の末はつらからず。御身のはてがお笑止と。ほわ身に通る恨泣。フシことはりとこそ見へにけれ。地七右衛
門は齒をかみしめ仔細をいはず居たりしが。こたへかねしか顔持上。詞誠に千丈の堤も。蟻の一穴よりくづるゝたと
へ。いふまじとは思へ共。地賢女貞女の女房娘。殊に眞實の子でなき故。むごい仕業と思ふいひわけ。一通り語て
聞せん。詞いふに及ばぬ事ながら。某は小栗殿の足輕。もと草履つかみより引上られ。重恩受し此身。主人小栗判
官御切腹有しは。皆横山がなす所。城を枕に討死と。十人の殿原三十人餘の御譜代家。何れも。城へこもりし時。
某も龍城と願ひし所。御家老岸由良之助殿。三十石以上の知行とりは格別。ふちかた切米のめんくは薄き御恩。
討死に及ばずと。武士の數に入られず。地無念と思ひし其内に城をむざく明わたし。皆ちりぐくに國遠す。淺まし
やかひなや我下賤の者成共。一合でも御扶持人。主のあたを報ぜずんば生ながらへてかひなき此身。とやせん角やと
丸一年しあんの胸をくだけ共。詞元來かるき奉公人。たくはへなければ工面もならず。何とぞあづまへ下る路金。手

覺の双物一腰。地拵たやとつおいつ家尻切強盗もし付ねば思ひ立れず。次第にせまる身の貧乏。渴して死なんと
 取かぶり。病氣といひしをおこたらが。醫者を頼んで藥の配劑。詞腕をくゝり胴をしめ。脉を見すればてんどうし。
 人參もらねば叶はぬといふ。地は幸ひ我なさぬ子を賣れとはいはれず。病苦おもく見せなば貞女なる女房娘。如何
 様にもして人參代調へくれるは必定。それこそ天のあたふる所。うばひ取てあづまに下り。主君のあたを報せんもの
 と。じひも情も義理合も。忠義に思ひフシかへしぞや。地しやむの玉子をあてがへば。ちやぼは我子と心得てあた
 めかへすと聞ものを。まして人間恩愛の。思ひを忘れ娘をば。賣して心よからうか。だますも忠義。だまするゝ。其
 身も共に忠の道。詞あきらめくてれ女房。娘よ。地了簡してくれと。手をすり膝すり平伏してフシ詫こが。るゝぞ哀
 れなる。地女房娘は様子をば聞て胸はれ共涙。さふ共知らではしたなく恨つらみの苦口は。勿體なや恥かしや。お
 まへのお主は我々が先夫も御恩の主筋。娘一人が役立てお爲に成は果報者。きげん直してサア旅立。わらはも娘が奉
 公の同じくるはへともなひ行き。親子一所のうきしのぎ。又の便りをし給へと心すゞしく引立れば。夫もふかくの涙
 を押へ。詞かく萬事をあかせし上。思ひとまらば猶不忠。娘よそんなら往てくれるか。仰に及ばず此身は疾くより合
 點のうへ。地只お身のうへ安穩に目出たき吉左右し給へと。かなしさ見せずすゞしげにいふも二おや涙の種。かう成
 事もやくそくと思ひあきらめくれよとて。夫婦が帯しめす合せ。つぼみの花を島原の。すもりにするか浅ましと。
 思へどかひも泣かくす。かさ買て着せるあたひさへ。涙のたねの近江路を。泣々。別れ。三重へ立出る。地横山郡司信
 久は。小栗判官兼氏に腹切らせ。思ふに心よからねばわづかの疵を養生とて。桐が谷の別所にこもり。夜晝わかず酒
 宴の遊。老を養ふ身の用心。出入る人にも氣を付て。光をかざす日かげもの門戸をとちぬ斗なり。地そばを離れぬ姥
 共。ちと氣延しとつれだち出。中にも歌木が聲をひそめ。詞なんと皆の衆聞ふ事有。此屋敷の殿様は。どこをどふし
 て斯してと。御普請の評定斗。おくさまでもお迎ひなされ。お部屋のだつ拵が。エ歌木殿とした事が。あの年寄

に奥様が。どこからお出なさるゝ物ぞ。じたい此方はお屋敷へ。有つかしやつて間がない故。何も様子は知らしやるまい。聲高には言はれぬ事。詞あの何時やらこちの殿様と。小栗様とやらいふお方と。地御殿中で喧嘩をなされ。其相手の小栗様は。切腹なされてお家もつぶれた。御家來の浪人衆。主の敵と殿様を。ねらふといふ噂が聞へ。詞小多文平といふ人を。都へ犬にのぼす程の臆病。まさかの時の逃道を。拵ておくのじやはいの。奥様よんでの錯ざんまい。突事よりはおぬしの身を。つかれぬやうの用害と。語れば歌木が打笑ひ。詞切られるのも突れるのも。おきらひならば殿様は。地鯨の生れがはりじやと。フシざはめきはなす其中へ。フシさかりすぎたる男ぶり奴と見ゆるかんばんは。紺のだいなし案内なし小腰かゝめて廣庭を。あゆむも會釋はやゝ笑ひ。縁先にかつ突這ひ。詞拙者めは樂内と申やつ。お屋敷には草履取が入用にねまり申すと。肝煮方より知らせて参り。御奉公すべいら。ゆくべいとこはりまらして。参りましてごはりますと。地なまりちらせば。姥共。くつゝゝと噴出し。詞テモ澤山なごはりまらす。女子のまへて不遠慮な。御家老中迄いふてやる。地供部屋へ往て休んであや。お目見へは後程こちから知らさうと。いはれてもぢゝない。ゝと内外を。用有けにそ爰と。見廻しゝ供部屋へ。フシしばらく休みに入にけり。地うはき者の藤浪が。あの人ほふよい年。さぞ若盛はよい男。奴にするはをしい事。惜いついでに歌木殿。詞つねゝこなたと中のよい。看賣の善助は。魚賣しそうな男じやない。地色白でしやんと。氣に入たは斷。詞今日はなせに遅いぞや。又何ぞくぜても御座つたか。ヲ、たしなましやれ藤浪殿。地さりととはけうとい缺徳利。わる口をはす共今の奴が。取次をしてやらしやれと顔ふれば。詞其さつはりとした口上地賢人顔が猶にくい。あやかり者と口々に。フシせなをたゝいて走り入る。地跡に歌木がつゝくりと。フシ物案じなる折からに。早野勘平家次とて。もとは小栗の家來筋。勘當うけても主君のあたねらひ近寄魚賣と。しづが手業に身をやつし誰をか思ひまゐらせか。壹荷になふていそゝと内へ通れば歌木は見付。詞待かねたコレ看屋殿。夕御膳の御用も有べし。外にまだ用

もあり。地いふことと有と立上り。フシ庭へおるれば。そらさぬ顔。調看はだん／＼御望次第。随分まけて上ましよが、外の用とは何の事。エ、内證の買物。桐の箱に入れて有る。水牛細工の御用なら。地今でも買って参らんと。フシよそ聞くも言ひちらし。地あたり見廻し奥を見やり。人音せねば善助が。荷かごをそつと傍へより。小聲に成て何と女房。首尾はどふじやと尋ねばさればいの。調色々と氣をくばれ共。今も今傍輩衆の咄を聞に。小多文平といふ侍を。都へ犬に入れたと有る。夫程の用心なれば。寢所さへ毎晩かはり。傍には大勢ねずの番。やしきの内は穴だらけ。あそこにあるあの井戸も。裏道へのほりぬき。地仕おふせそふな折もなく。おまへの顔を見るたびに。一ぱいかせかるゝと。打しほれば道理々々。調幼少より親諸共。浪人の身と成て。地あげくに主人にはなるゝ様な。微運至極の我なれば。今更運のいたらぬとて。驚くへぎには有らね共。かく安閑といつ迄も。あだに月日をくらす事。草葉のかけの我君も。先立父もふがいなく。いひがひなく。フシ思されん。地けふは是非に切入て。調横山が首とるか。夫婦が。かばねを爰にさらすか。二つに一つと定しが。おことが心はどふじや／＼。地實におつしやれば其通り一時おそいも不忠不孝。めいどへのお土産には。横山があの皺首。幸おくには酒宴の最中。調いつとてもあの跡は。前後を知らぬ高いびき。仕損じたらば腕かぎり。討死すると覺悟して。夫婦一所に切込ましよ。私も胸をすへました。地ヲ、いさぎよし重疊と。しこみの枴腰にぶつこみ。女もかいどり引しめ／＼。かくし持たる一腰を。追取ておきばさみ互になづき言合せ。奥を目がけて切こむ風情。やれまて暫しと件の奴の小聲をかけて走りくる。あはやと夫婦がふり返り。止むるからは子細を聞らん。いけて置てはさまたげと。こい口くつろげ詰寄れば。コリヤ手むかひせぬ庵相すな。いふことと有と押しづめ。夫婦共に氣色をかへ。奥へ切込きつさうは。鼈に横山信久を討とると覺たり。地いか成者ぞ譯を語らば。とも／＼に力共成べしといふに勘平氣遣ひながら。調ヲ、名が聞たくばいふて聞せん。小栗判官が家臣。早野七郎大夫が一子。同苗勘平家次。是成は女房。主君のあたを報せん爲なり。地とめだてして怪我すなと。女も共

に勢ひかゝれば待つた。せくなと押とどめ。詞シヤ扱は先年御勘氣受。お國をたちのき切腹有し。七郎大夫の一子勘平殿とは貴殿の事か。地左様ならば見しらぬ筈。詞某も小栗の家來。寺澤七右衛門といふ足輕成しが。何とぞ主君の敵。横山が首引さげんと。今日始めて下司奉公に入こめ共。大岸由良之助親子。原郷右衛門と三人に。横山油斷せざる由。今では本意とげられまじ。地つくくくと按ずるに。討べき時節を求るてだて。御身は是より都に登。大岸親子郷右衛門見しらぬを幸に近寄。詞敵を討べき所存有か。とつくと様子ためし見て。地若腰ぬけの輩ならば。きやつらを討てしまはれよ。さすれば横山心もゆるみ。身の用心もおろそかならん。地其時我と心を合せ。横山が首討て。小栗殿の修羅のいかり。おやすめ申奉らん。地それ迄は無念を押へとも角にも本望を。首尾よく達すが忠義ぞと。フシ詞をつくし宥むれば。地勘平も寺澤が諫の詞尤と。思ひながらも是迄に心をくだきし忠節の。無に成事の口おしく返答もなく泣居たり。地歌木も共に涙聲。男も女も是程に。小栗様の家の子は。かたちのわるい管成かと。主を思ふも夫故。フシ心ぞ思ひやられたる。地夫婦がなげく心を察し。寺澤も目をしばたき。詞いにしへ曾我の兄弟が。廿年の其間貧に苦しみ祜經を。討たるためしも候へば。地心ながく思しめ併しかやうに申せばとて。討べき敵をおめくと。助けおくには候はず。詞今にてもあれ。折よくば共に恨をばらさんと。地詞を残し氣をいさめ心をくだく折からに。奥より人音聞ゆるにぞ。此有様をや見とがめんと夫婦をへかたへに忍ばせて。寺澤はな歌口拍子うてぬ。フシ顔して立居たり。地ぬつと出たる山形兵衛。寺澤もとび石に手をついて畏る。山形一しを腰をしやくまし。詞ムウ草履取の樂内とは汝な。ヤイ有がたく思へ。殿の直に是へお出。支關さきを御覽。地用意せよといひければ。詞是はく有がたし。奴めうりに叶ひし事。宋代迄も此事を拙者めが系圖にいたさん。地冥加にあまると敬ふ所へ。酒のきげんに目もちらく。たて成物も横山信久。近習小姓に手を引れ。一間の内へゆうくと押なをり。けうそくに體をどつかと横おれて。あたりを見廻しねめ廻し。くわんくたる胴聲。詞今參りの草履つかみ。樂内とは己

よな。どりや身が前て一ふり振れ。地目の役に見てくれんと。我なぐさみさへ恩にかけ。にが口いふて。フシきめ付
 る。地ハはつと答へて樂内は。遙さかつて懷中より。用意の草履取出し。ふり出す手さき目八ぶん。宿へ下馬さき玄
 關前。出陣かいちん祝儀の草履。詞眞の草履。行の草履。扱又高位のお供には。地旦那の草履を此やうに。なげて直
 すが口傳の草履でござりますると出放題。物々敷言並べ。二足三足跡じさり。しいくくとフシつくばへば。地醉
 のまはつた横山。詞彼奴めはうみやつ抱てやれと。地いふ内もはやとろく目。居眠りたをれ正體なし。山形始め近
 習小姓。四方の障子さし廻し。御意に入たる樂内。勝手へ立ち休息せ。はやゆけくくと追のくれば。ないく
 くくと樂内が。ふり返りねち返り。横山をながめやり残多けに入れれば。しばらく御前をひらかんとフシ皆々次へ立
 にけり。地すきをうかひ勘平夫婦。そつと立出身がまへし。寺澤はとむれ共。本望は此時ぞ。女房ぬかるな。ま
 つかせと。互にいさみ差足し。天へも上る心地してそりくくと歩みより。一間に近付大音あげ。詞大敵を持ながら。
 地太山におく枕は不覺。詞小栗判官兼氏が舊臣早野勘平。女房歌木。主君の敵横山郡司。かくこせよと名乗かけ。障
 子をさつと引はなし。入らんとすれば是はいかに。四方をかこむ鐵の網。内には横山むつくとおき。あたりを睨んで
 立たる有様。コハ早まりしか残念やと。こぶしを握り石をかみわる思ひにも。フシ詮方なくぞ見へにける。地横山から
 からと高わらひ。詞兼てよりかく有らんと。拵置たる鐵の網。一人前のくろがねの城郭。己等ごとき匹夫の手に。
 討るゝ様な横山ならず。身の程しらぬ愚人原。地土壇になをしてよき肴。あれ引とらへ料理せよ者共やつと呼はる
 聲。畏つたと。侍共。前後をばらりとおつ取まき。フシ我討取らんとひしめけ。地勘平夫婦は是迄と。太刀まつか
 うに死物狂。あたるものを幸ひになき立く難廻り。フシおくをさしてぞ切入たり。地爰ぞ大事と樂内は息を切てを
 どり出。一間にこもりし横山へ御願とひざまづき。詞何とぞ奉公始に。狼藉者を拙者めに仰付られなば。しめ上て御
 意に入れん。地御ゆるし下さるべしと。ねがふに横山いしくもいふたり。詞己が望にまかせてくれん。いさぎよく捕

て見せよ。地畏つたとつゝ立上り。尻ひとつからげ早繩たぐり。身がまへして待所へ。勘平は大わらは夜叉の荒たるごとくにて。大刀引きかけ出るを。樂内すかさず聲をかけ。詞ヤアふかくなり早野勘平。とても叶はぬ此場のしぎ。腕をまはして尋常に繩かゝれ。コリヤ。くくく。是りや。切抜けて逃る共がしはせぬと。地詞のはしく心を付けて居合腰。とつたくと詰よれば。せきにせいたる勘平が。耳にも入らず己共。まつ二つにしてくれん。とつて見よと振上る。太刀の下へ入身は入ぶん。詞サア捕れ。捕るぞよ。地サアくく。と兩方額に汗たらく。脇目もふらず横山が。守りつめたるつら魂。樂内あき身を見すまして。とつたと小腕に取付ば。引はつして切付るを。鼻ねぢふりあげさそくに受け。一はね勿て霞のあて。小枝おろし膝車半月三月月自己の誤。とりじめ袈裟投かたんの。枕をわりし手利の働き華やかなりける。三重、次第なり。フシあらそふ所へ。地山形兵衛大勢引具しむらく。ばつと立かゝるを。樂内せいで。よるまいく。詞申受たる此科人。奴めが命にかけ。是迄は仕おふせたり。地仕上を見物なされよと。言ふやいなや身をかはし。引まはして小膝を折。えいと沈みし四寸の身。とたんの拍子絹かづき。そばなる井戸へ勘平を。取てなげ込み立上り。さあ仕てやつたと言ふ聲に。横山驚きヤア樂内。詞それこそは掘抜にて。裏道へのぬけ穴有。ヤレ追かけて討とめよと。地あせりにあせれば山形兵衛。家來の手くぼり東西より。ことちさすまた引下げく。裏道さしてぞ。三重追風に。フシ征矢を射かけし。地ごとくにて女房歌木は寺澤が。情に一方追ちらし。切ぬけく。裏道迄。左右にひらめく刀の稻妻。坂額巴があれたる勢ひ。おちくる跡より敵の家來。通さぬやらぬと追來るにぞ。詞シヤ物々し手なみは御ぞんじ。いづれも是迄お出は御苦勞。何なく共此二腰私が志しんじつの御馳走と。地詞はうまく手しぶい相手。へた侍にわたり合。命がぎり根かぎり。一心念力いかりの太刀さき。弓手馬手にて切結び火花をちらして。戦ひけり。地たよはき女の多勢に出合。敵は荒手を入かへく。すき間もあらせず戦ふにぞ。數ヶ所のきずに目もくらみかつばと轉べば大勢が。首討おとせと立寄て。フシ既にあやうく見へし所へ。地掘ぬき井戸のぬけ口

より。ずつと出たる早野勘平。そりや出おつたはそついを仕舞へと。追取まくを隙間もなく。はらりくと投廻れば。こりや又手ひどい廻るがほんと。四方へばつと遊行を。フシ何國迄もと追てゆく。地夫の聲を聞とがめ。女房はむつくと立。刀を杖にたぢく。風にもまるゝ柳のごとく。よろゝするをふみしめ。あたりをながめ聲を上げ。詞なう我夫勘平殿。長追はしし給ふな。これのふく。地と呼かへせば。勘平も立歸り。見れば深手にくるしむ體。氣もきへくんと手を取て。心はいかゞといったはれば。夫をつくく打守り。詞屋敷の中はやうくと。寺澤の情にて。爰迄は落のびしが。もふ付添ふて行事ならぬ。又敵が追くれば。此うへの御なんぎ。おまへが討れ死し給へば。お主へ不忠親御へ不孝。地わたしを此まゝ爰に捨おき。はや落給へと押やりて。草にとうど身を投ふし。夫をかばふ心の内。フシせつなくも又わりなけれ。地勘平も涙ながらいさみを付んと聲高く。詞是程の淺手にて。命にさらく氣遣ひなし。かた脊にかけて此ひまに落行べし。地いざ來れと引立てば。いやなふ。詞それは不覺なり我夫。前に大事の忠義をかへ。後に手負の女をおひ。地若もの事が有ならば。天下の人の笑ひ草。寺澤殿の仰のごとく。詞由良之助や卿右衛門に心をおき。用心きびしき敵なれば。かるく敷は討れまい。都へ登て其兩人と。心を合せ本望を遂るか。さもなくば。敵に油斷をさする方便。地是こそは一大事足手まとひの目。是迄もお見捨なう。召つれられし厚恩を報じはせいで此上の。おせわに成は罰當。未來も地獄のたね成ぞや。此場を見捨給ふのが。私の爲に罪ほろぼし。地さあさあ早うといふ内も。次第にくらむ目のひかり。コリヤ氣をはつたりと不甲斐ない。情ないとおをつ内。我つま苦しうくといふが。此世のはなれ際。終にあへなく成にけり。勘平ハツト泣たふれ。我に手柄がさせたさに。心にそまぬ敵へ奉公。何の詮なきむだ骨。かわいの者や不便やと。死骸にひつしと抱きつき。フシ聲を惜まず泣さけぶ。地なげきの中へ又むらく。先にすゝみし家來が高聲。調くたばつたる女房に。それ程名残がをしいなら。たゞき殺して丸はだか。一つに重ねてんこぼし。犬の餌食にしてやらんと。地おめいて。蒐れば立上り。ヤアよい所へよう來にな

ア。岡おのれ等をかたづくるが女房への追善。サア来いやつと地なき立て。切て廻れば逸散て。フシあたりに近付者もなし。地相手なければ勘平も。歌木がおしへ寺澤が。いさめに心を取直しよし。此身は宙宇のかり物。本心ふるすへ歸りたる。女房が亡骸だきかゝへ。涙ながらに立歸る。夫が心の無念さの胸をさするは忠孝慈愛。五常はそれとおのづから。備はる印残るは五輪。無常の。浮世と悟れども。にらみやつたる横山がやかたに。恨を残しつゝ都の方へと急ぎける。

第三

地直指人身見性のフシ御法の聲もかすか成。北山陰の片邊スエ瑞祥院と聞へしは。小栗判官兼氏の建立にて。藤澤寺の御廟所をうつし建たる石塔に。蓮光院清毛圓利大居士と。關塔玉垣きらやかに思ひ出せる御命日フシ殊勝にも又傷はし。譜代の御家人多き中わけて大岸由良之助。利雄といひし國家老都の内に足をとめ。けふ廟參の花の露。しきみ一枝馬手に珠數フシうつればかはる。佛も。浪人の身の深あみ笠御墓にむかひ水を換へ。香花をさづけ涙をうかへ。誠や生者必滅の悲しみ悔む道には候はねど。調君はまさしく。横山郡司が爲に早くも修羅のやつこと成る。地無念やいまだ時不到らず。むなしく光陰を送る事さぞいひ甲斐なく思されん。残念至極と齒をかみて。こぼす涙に百八のフシ珠數もきれゆく計なり。地跡より二人古傍輩岡野金平不破數馬。是もかはらぬ墓參。淺黄上下白むくの。フシ袖をしぼりて歩みくる。地合掌おはつて大岸はそれと見るより。調是は。御兩人。未明の參詣御きどく千萬。亡君のなきからは原卿右衛門が鎌倉にて。藤澤寺に納めしか共。此寺則君の建立。地御魂のすはりし所謹んで御焼香。然るべしとあしらへば。兩人はつと小腰をかじめ然らば焼香仕らん。調數馬殿いざおさきへ。マヅ。其元。地御免あれと互に辭義合焼香を。心靜に相勤。フシかたへにこそは立直る。地大岸由良之助聲をほそめ。岡かねて申合

す通。亡君のあた横山を討つる密事。十人の殿原三十餘人の御譜代家。皆一味連判を致させん爲。御墓参りによそへ此寺で會合。子細は後刻申合せさん。地先血判をなされよと連判狀を取らせば。岡野金平不破數馬。兩人共に詞を揃へ調數ならぬ我々一味の願ひ相かなひ。武門のほまれ死後の面目。地大悦至極に候と小刀ぬいて二人が指さき。ぐんぐと突てしつかとすへ。フシかくの通りと差出す。調示、ヲお頼もしやお血が若い。無二の働かんようく。擬いづれも神文は御墓の前。申合せは。地一間の内て致したし。御兩人は寺僧にあひ無業の非時をあつらへ方丈をかり給へ。お出く指圖にまかせ。不破も岡野も打つれて。寺内へこそは急ぎゆく。地跡より来る三人は堀江彌五郎同安入。磯合十郎照久。朝日にかゞやく金鏑の刀の錆はとがず共。心のさびを磨き合。おくれは取じと。フシ歩みくる。地由良之助立向ひ。調堀江殿御親子。磯合殿かやれく。早先達て若殿原方丈へ通られし。地いざく焼香々々。いふに従ひ三人は。花さしそへて水手向。三拜おはれば山良之助かの一巻を押ひろげ。連判あれと差出せば。望所と三人は。めいく血判事おはり寺中をさして。フシ入にけり。フシはるかに見れば門外よりしづく来る五人づれ。谷水藤藏木村岡兵衛。村井喜兵衛島岡八十八。矢頭門七いづれも揃ひし功の武者。由良に目禮石塔へ。いづれも焼香入かはり。地香花をさゞげそれく回向をなして大岸が。手弓と馬手へ立まはり連判狀を段々に。引よせく是こそは。かねての願ひ本壞と。皆悦びの色をなしフシ血判有ぞたのもしき。地由良之助笑含み。調重疊々々。いづれも御寺に會合ぞ。地早御入と差圖にまかせ行儀亂さず。フシ通ひける。花は小櫻。人は武士。フシ見なれ聞なれものゝふの。數に入らんと大岸が。一子力彌は只一人。心いそぎて。フシ來りしが。地父と見るより走り寄。目通りに手をつかへ。調承れば今日。一味同心のめんめん血判をいたさるゝ由。何故私には御沙汰なく候や。地若御失念候かと恐れ入て尋れば。由良之助氣色をかへ。調ヤア失念かとは疎忽の一言。大事を思ひ立もの眩忘してよき物か。汝にいひ聞さぬは所存有ての義。地はやく歸れとしかり付。フシ殿原おそと待居たり。地力彌ははつと胸ふさが

り。詞御失念かと申せしは心せきての誤。地私も共に一れつの數にくはへて給はれと。おろく涙で願へ共ならぬならぬ。詞己が様なひきやう者。數に入れては大事の妨。歸れといふに歸らずはしあんが有るが忤めと。地きめ付られてうろく誰を頼まん方もなく。首尾を見合せ居る所へ。又大勢の殿原達村松親子を始とし。間瀬久四郎朝田の又市。前原伊兵衛矢田部の五郎。わけて名高き奥林定七郎は大前髪。譜代の老若入交り思ひの志。松としきみに色花をさしそへながし手向花。胴をかためし參會は。水きは立て見事なり。地一々連判遠慮なく我さきにと押合せり合。勇みに勇む有様を見て居る力彌は猶せき立。紛れて共にとかけよるを父の大岸八角の眼をくわつと見ひらいて。にらみ付ればせん方も。もみ手の内に事すみて。教へにまかせ人々は樓下。つたひに方丈の。フシ評定所にぞ入にける。地力彌は見るにたまり兼由良之助が足本に。どつかと座して是父上。詞年のたらぬ我なれば足手まとひと思し召し。言誤をとりこにし連判はぶき給ふのか。小腕なれ共人きる事見ごとお世話になりますまい。地お國の母様お供せばでかした一味と一番筆。お悦びの顔見よに五十里へだてゝ呼にも行かれず。こんな時には猶戀しい。不調法な事あらば了簡して連判に。加へてたべ載てたべ。叶はぬならば手にかけて。いつそ殺して給はれと。悔みなげけは由良之助。哀と思はぬ眼色にて取てつきのけ。詞ヤアしちくどき忤め。一大事の連判已ごときを輕々しく一味の内へ加ふか。御廟所の前といひ親に對して恨の一言達てぬかすと。未來永々。勘當するがうせぬかと。地取て引立つきはなせば。力彌はとかふ詮方も。涙より外詞なく。フシしやくり上たる斗なり。地折から来る侍は原郷右衛門定時。大鷲傳五忠光兩人おさへるの連判役。ともなひ来るなり姿。力彌はなく目にそれと見付。走り寄て涙を抑へ。詞ノウよい所へお出。憚ながらお二人へお頼申筋有。地お聞もやと尋れば。原も傳五もあみ笠取是はく。詞誰有ふ大岸殿の御子息。随分頼まれ申さん。お頼とはいかやうの義と。地問ふも嬉しくまあ御禮からと腰かどめ。詞お頼とは外ならず。ちとした詞の誤より。父上のきげんを損じ一味の連判かなはず。國へ歸れとお怒り。口惜いやら

悲しいやら。腹切らうかと存ぜし所御兩人のお出。何とぞ詫言なされ一味の數に入るやうに。ひたすらにお頼申す是手をさげます拜みます。地慈悲と思ふて頼まれて。下さりませといふ内も。はや涙にぞくれにける。地兩人是はと手にすがり。詞ハテ何事かと存ぜしにやすい事。それは親御が其元の。性根を見ようと態と口ごは。我々が申たらしい事。のすむ事氣遣ひ有るな受取たと。地いふに涙もせきとまり。詞有がたい。忝ない。萬事は頼み。イザお出と地人を頼めば身をさげて。詞郷右衛門様。お袴の腰板がゆがみしと。地直すやらしめるやら。コレハ慮外とゆく跡の。傳五が袂引とめ。お白むくに埃がと。地たゞき落して吹はらひ髪のかみを押直す。下部がわがも身にとりて。わびを頼みの追従は。フシ哀にも又いたはし。地原郷右衛門大驚傳五。大岸がまへに膝を折り。詞今朝よりさぞ御退屈。いづれも連判相すみしかお尋申といひければ。由良之助連判狀をひろげ。残らず相濟方丈に會合。御兩人斗なればはやく判をすへられ。地一間へお出と。フシいふにしたがひ。地血判をすへて機嫌をうかひ。郷右衛門愛ある顔を猶やはらげ。詞擬大岸殿へちと御無心有。御子息力彌殿。連判をはぶかれしと。殊の外なる御なげき。いまだお年若なれ共。天晴御自分の御子息。一方をふせぎかねぬ御器量。きげんを直され連判に。召くはへられ下されなば。我我迄が大慶と。いふに大岸ア是郷右殿。悴が事おかまひ無用。ちと所存有てはぶきし。様子御ぞんじない事と。いふを傳五が。イヤ様子は何かいひ。誤が有たる由。かたい其元のお心ではお腹の立は尤。ノウ郷右殿。それ。はつめいな力彌殿。いひ損じは文珠も筆。又御自分へわりくどきを申は釋迦に經。地獄に佛にあふた様に我々をお頼み。乗かゝつた船と思召。いざ。御了簡の御詞。兩人がお怒りを貰ひ申。コレサ力彌殿。爰へ來て共々おわび。地はつと座してすり寄を。大岸眼をくわつと見ひらき。詞ア悴めまだ歸らぬか。御兩人もわび無用。地所存有て連判かなはず。立てうせよと大地を打。きつばを廻す其勢ひ。力彌は元より兩人の。挨拶人にも興さめて。フシ口をとちたる笑止さよ。地短氣にうまれし大驚傳五居だけ高に成り。詞ア子息へは格別。郷右と某口をたれ膝をだくに聞入れなく。

立ちかへればムウ聞へた。此度の連判。本望とげてても遂いで死を一同と定めし故。子の不便さを憎さに見せかけ。連判はぶき命めてたふ何時迄も。石にねつぎの柱ぐみ悟つた。大岸殿。そりやさましいと囁られ。地すがの大岸返答に。涙をふくみ。ヘエ、聞へぬいひぶん。詞郷右衛門も其疑ひ成べし。よいはぶきし所存。地お目にかけふとつ立。力彌を引寄懷へ手を押込てさがし出す。小幡な掛地は何ならんと見る内石碑の覆にかけ。さつとひらけば是はいかに。三十四五な女房の。あてやか成し繪姿はなまめかしくぞ。フシ見へにける。地由良之助立なをり御兩人見られしか。地あの繪がきし女は。國元に残したるかれめが母が繪姿。親の口から申はいかゞなれ共。忤力彌めはうまれ付て母に孝行。國元を出る時しばしの別を悲しみ。繪にうつして肌身をはなさず。旅宿の間も一間にかけおき給仕奉公仕る。地わけて此度の思ひ立。何れも親を捨妻に別れ。跡に念を残さぬ仕方。詞さすればか程に親をしたふ根性。まさかのときにも思ひ出し。逃かくるゝ所存有つては。亡君の御名のよこれ某が恥辱。つれぬがましと了簡し。地思案を極め。フシはぶきしぞや。地さあればとて孝行を不孝にせよと我口から。意見も杖もあてられず。詞主の爲には親の首。討もならひて候に。地かゝるみれんな忤を持面目もなき物語。沙汰なされて下さるなど。語る間もにくい半分ふびんさも。こもる涙の一雫。原も傳五も尤と。フシもらひ涙にくれ居たり。母が顔もよう見ておけ。にくれたはしや母様の。國を出る其時に。詞敵に向ひ討死せば。もふ逢ふ事も是かぎり。母が顔もよう見ておけ。地そなたの顔もよう見せよと仰られたる一言は。骨身にこたへ。フシ忘れかね。地此世に居るはわづかの内せめてはお妾繪にうつし。御奉公申さんと。たくはへ持しが今は仇。せんなき我身や。浅ましの運命やと。大地にどうど打たふれ大聲。上て泣けるが。地今は敷きてかへらぬと思ひ定めて座になをり。詞申郷右衛門さま。武運につきし私腹かき切てめいどへ行。主人小栗様へ申譯致したし。地御苦勞ながら御介錯と頼めばうなづき。詞ヲ、御尤さりながら親の慈悲と申せばノウ由良殿。どうぞ御了簡有るまいかな。いかな事。いけおかば某が恩愛にひかれ。残し置しと沙汰せられ

んは治定。地末代のはぢ先祖の恥辱。かれめが望に御はからひと。思ひ切たる武士かた氣力彌はやがて立上り。主人の石碑に差向ひ。誠に主の爲には親の首うつが本意で候を。みれんにも親をしたひ連判はぶかれ。申わけもなき仕合。詞是より根性改め。めいどへ參つて忠勤はげまん。母の事おもひ切たる印。草葉のかげから御上臈と。地走り寄て母の繪姿ぬき討に。フシはしと切つて切おとせは。地由良の助け小をどりして。詞でかした悴。切腹せずと急いで連判地ハツト嬉しく押手もはやく。イザ會合と引つれていさみ進みて。三重入にけり。フシ戀は心の外になきみやこ地島原三筋町太助が軒のかけ行燈。とぼすと早く打太鼓。ながれの里も火の用心。我も夜露を用心と顔に手拭つはりと。はいる表の番部屋はフシ我物にして遠慮なき。フシかよひくるのは。花よりも。まだ色ふかき美少人。大岸力彌利金が忍びあみ笠大小も。さし合くらず父が跡。したひ來りて近江屋の太助が。門に案内する。地折節奥より主の女房。どなたかようぞと應對へば。地イヤ苦しい者此所に。大岸由良之助殿がお入有筈。ちよと合してと押付て。地とへば成程奥の間に。今ようやすんで御座りんすと挨拶聞てしづくと内に入り。詞然らば爰に待おらふ。お目がさめたら知らせと。地遠慮なき體でも扱ても。詞お若衆の待おろはお國詞かそんならば。私も勝手へ立おらふ。デエお茶くんで。地來居らふと。フシひんしやんとして入にけり。地力彌は人目のあみ笠をぬぎもやらず見廻せば。はなれ座敷の方よりも主と見へて若よねと。何かせり合あゆみ來る。邪魔にならじとわきへ寄り。フシ猶顔かくしゐる所へ。地亭主太助はよねを引つれ。かたへに座して是九重様。詞ア、おまへは悪いがてん。ふりづめに成さるゝお客。否はすいが見ておいた。あつちにも年だけであはふ共仰しやれぬ。が躬受とはうまい。早速つれて往のではなし。手付をわたり國元から迎ひとの事。誰あらふ今日の出の横山さまの御家來。まあおつと仰しやつて。跡での思案。ナ。そふじや有まいかな。ア、まだなく。フシまだるい事と進めこむ。地九重は顔もち上げ。詞太助さん聞わけがないぞへ。あなた斗じやない。どのお客へもいふ通り。わしにはな。小栗様の御浪人。大岸由良之助様の御子。力彌さん

といふ深い馴染のお客が有る。此かたと二世三世。變るなかはらじと言替して置たれば。身うけの事は扱置。ちよつと寢間へも足ぶみなならぬ。世話やいてくれなさんすなと。はねぎられて亭主はかつくり。地こなたに聞居る力彌はふしぎ。思ひもよらぬ難説と。耳をすまして聞取るてい。太助はせんかた頭をかき。詞エそんなら斯うしてくれなさんせ。マツ否應はぐずにして。むかひに來た時の事。手づけは我らに預りぶん。ナ。そふしよ。はて思案には及ばぬ。萬事は我等のみ込み。マアそふ思ふてくれなさんせ。フシといひ捨與へ走りゆく。地氣は鐵石の大岸力彌。身に覺なきせんぎをと。あみ笠取て九重が傍近くどつかと座し。詞ヤア爰な偽女。某こそ大岸力彌。父由良の助殿折のくるは通ひ。お諺を申さん爲。此里へは今宵が始て。つゐにあひ見もせぬ己か。某とふかい中二世の約束とは父上への聞へも有。地何故に偽るぞ白狀せい女めと。せきにせいたる面ざしを。九重つくく、打守り。おめる色なく手をつかへ。詞誠におさなき其時に。餘所ながらの戀草。おまへには御存じあるまじ。もと自は同じ小栗様の足輕。寺澤七右衛門が娘やつと申者。地父はしもさまの者なれ共お主の敵討ん爲。自が身のしろな路銀とし。詞横山が館へ入込しが。過つる比の便に。由良の助が傾城狂ひが聞へ。敵ゆだんの色あれども。一子力彌に一味もあらんと心ゆるさず身用心。本望とくる折なしとの文のぶん。地女のあたはぬ心から。おまへと我と濃中と。ばつと沙汰せば父上の願ひの便と思ひ付。御名をけがし。フシ候ふぞや。地お主のあたを報せん爲。親子三人さまんの。憂き苦勞を致す事。不便と思ひ何事も。ゆるさせ給へと打しほれ涙。さきだつ斗なり。地始終を聞て力彌は手を打。詞頼頼もしの志。それに付て思ひ合せば父上の放埒も。思案こそ有べし。地敵油斷の便にならば二世と成共五世と成共。勝手に名をば立られよ。そふ共存せず恨しだん。わび致すると取そひて。手をつかゆれば。詞ア、勿體ない何のおわび。其かはりに私がいふ事。合點しておつといふて下さんせ。地おまへとわしとき名が立ば。敵のゆだんはお主へ忠義。根にない事は言はれぬ物とんと有名がいはれたい。ほんにほんぼに病付たとじつとしめ付手の内て。指に思ひを知ら

れば力彌は戀のいろはもじ。ゑひもせぬ内あからみて。エそんな事はゆるしてと。ふり切るを引とめ。詞今更の事でもなし。お國にゐる時よそながら思ひそめても雉子と鷹。地ほにあらはして言ふからは。否とあれば死ぬるぞへ。とがない者を殺しても大事ないかとおどし掛け。やいのくんと取付て。いだきしむればさすが又。つぼみの花も色付きて。フシ開きかゝりし折からに。地父の大岸由良之助。ねほれし顔も大盡風。ふすまを明てぬつと出る。二人ははつと立われかれ赤面詞もなきていを。打とけ聲て是は扱。詞御子息あぢをやるゝ。古い人がいふた通り。かげ裏の桃の木もなる時分にはなるの。ハ、アいか様。瓜のつるに茄子はならず。蛙の子が魚に似ても。やつぱり蛙じやまで。是お女郎。悴力彌にきだんそうなが。逢はす事はまあ成らぬ。其わけは。アレはなれ座敷の客は横山が家來。我々が身持をうかゞひに來る侍。貴殿に思ひ込て身うけの相談有るさうな。どれから何處へどふ頼まれ。戀の手管て有うも知れず。誠力彌に執心ならば。表の客と手を切て。慥な證據を見せたがよい。きけば七右衛門の娘とある。さすれば一合ても扶持人のすへ。手の切やうは知てである。ナ合點か手を。地切て見しやれと切口の。りつばすつばの大岸が詞に品をふくませて。力彌來れと諸共に。フシ一間へこそは入にけれ。地跡に残りて一思案やる方もなき折からに。番屋の内てどんと打一ツ太鼓は相圖と聞へ。思ひにくれし九重があいと心て返事して。立ち表へあゆみ出番屋の戸口に聲ほそめ。詞お呼び遊ばすか。御用有やと尋れば。地内より戸口ほそめにあけ顔を出すは九重が。母とはいへど形か。それ聞たさに呼ましたと。いへば娘はアかゝさんの入らぬお案じ。いつ迄成共ゆるりつと。おいて進じよ其かはりに。地折々太鼓に廻れといふ。悲しけれ共借る賃と。思ふてたべとフシ涙ぐむ。詞ヲ、あの人は又泣やる。夫は遠きあづまの旅。跡に残つてわし一人住家もなき身のうへを。地苦界に取まぜ世話にして。爰においてたまる故。詞朝晩にそなたの顔。見る嬉しさにつらい共思はぬ。必ず苦にしてたもんなよ。それはそふじやが連合七右衛門殿から。

五月比に文が来てそれからからふつり便りが無い。地此間は取わけて夢見も悪しく氣遣ひなど。案じに涙うかふれば。ノウそふ思召ならば幸ひの事なる。詞私を此間あげづめの客は。と様の入込てござる横山郡司が家來。地氣のつかぬ様餘所ながら。問ふて見てお知らせ申さふ。氣遣ひ有なといふに母親。詞ナニ横山の家來があげづめとや。そなたは其座を勤めたか。イヤ盃の相手斗。何にもしなは御座んせぬ。イヤ合點がいかぬ。横山が家來ときかば。相火も共に喰ぬ筈。そなたは最ふお主の恩を忘れたの。地つね々もいふ通り。おことがやうく三ツの時。詞實のて親武大夫殿は自にさり狀殘し。地お姥と密通しお國を欠落。途方にくれし折から。詞今の七右衛門殿へ御意をもつて。夫婦親子の縁ぐみ。其時の有がたさ忝なさ。思ひ出す毎度に。地めいどへお禮を申ぞや。地其お主の仇がたき。横山が家來の慰みものに成やうな。ひきやうな心が有物か。器量がよさに思ひ付たか。但しは欲にまよふたか。言譯あらばサアきかふ。ヘエ、さもししい心になつたなと。いひつゝ戸口はたとさし。フシ忍びなく音ぞあはれる。地九重とかふ返答を何と。いふべきやうもなく涙にくれてゐる内に。地かの鎌倉の侍が。詞九重殿お女郎。何處にへと尋ね出る。地はつと思へどさあらぬ體。泣く目をかくし内へ入る。詞エ表に何してぞ。誰ぞ有かと差地のぞく。母の姿や見られんと大戸くどりをはたとさし。誰も無い私斗。フシすんで居たと紛らかす。詞ム、ウすんだとはこなたも酔ふたか。ていしゆ夫婦もたはひがない。それはそふとちと直々にいふ事有り。地爰へへと座をしむる。大岸親子は何をがな語るぞ聞んと差足し。奥より出て襖のこなた母は我子をしかりつけ跡の案じは親のくせ番屋を出てそろそろと。表の方に耳よする。九重ははや合點。詞話す事とは又身受の事かへ。迎ひにおこそ胡亂な事。地わしやのみ込ぬとフシもたすれば。詞ヲ、成程それも尤。今さつはりとしたけれど。路銀計て持合せず。ハテ迎ひといふに偽ない。それ共偽と思はじ。親方つれて來たがよい。鎌倉にて誰あらふ横山郡司が家來。即殿のお居間わきに居室を給はり。何不足なくらし。表門から家根が見へ。裏からははふまで見ゆる。地案内しらねは

ずつとは来られぬ。教ておかふといふに氣が付。シヤよい事をと九重が。とても事に大名の。屋敷掛りは何のやゝな内の居なし。夜晝の番々役々きびしさは。どんな事ぞと問ひかくる。詞ヲ、大名といふ者の。くらしはくわんくわつ關東に。又と並びのない屋敷。咄てびつくり手をうたさふ。地ゆるりとフシ居やれと居直れば。地由良之助は力彌に目くばせ。矢立を出して口うつし。繪圖にとめんとすまし聞く。表の母はまさかの時役に立べき事なりと。柳の楊枝かみしめく筆になし。掛行燈にとまりたるかゞりを即座の油煙墨。命毛ふとき髭侍口をそらして咄しける。詞先主君の御館と申は。東西四方百間に。一間たらぬを人毎に。ふそくといへど我目には。地はつ明頓智のフシたてかたなり。ぐるりに高塀大長屋。御門けやきの金物づくめ。鐵のどうづきかけたり共よや拔じのかんじん要の柱のすへ石。すこし動くを我ならで。外にしら木のフシひの木の御門。見付は玄關大廣間。こなたへ廻れは臺所。あなたへ行けば長廊下。四季に花さく。櫻の間。居間へゆく道三十疊。調鼠も通らぬおとし穴。忠と孝とを。地つくくし。繪書し所は繡ふすま。是夜の内に寢ずの番。虎を畫たる一間こそ兩のかいなを取手役。詞是に密事はこなたより。あづちを越て裏つたひ。樋口のわきの柴部屋へ。通ふほそ道ほそくとも。心はふとき侍部屋。中間へやて名をいへば。教てすくにくゞり門。あとさき心築山を。ひらりと越て腰だけの。はぎの柴垣しほり戸をそつとあくればお泉水。水ぎは立て束むき。詞そこが則殿の居間。我等はこちらの南むき。ぬぐう見へたる所こそ。地蔵かとぼそで候とフシはなすも時の興ならん。地由良は一々筆を染め。母もあらまし覺書猶も様子を聞取る内。九重は胸をすへ大岸親子のうたがひと。母様へのいひわけに。一太刀でも此者をとだましよつて腰刀。ぬき取る所をコリヤどうじやと。押へられてはつと赤面氣もあがり。心ふるへどさればいな。詞お前のおんまり念比な。お心が嬉しさに。心中に指きるのと。地たらしかくればふはと乗り。詞それは忝ない。せめて爪のはしくれでも。ちつくり切てくれめされと。地ぬいて渡する氷の双。サア仕てやつたと心もせき。只一太刀とふり上ても。さすが女の胸だくく身はがたのフシふる

ひ足。地ふしぎの立ぬ其内と思ひ切て一刀、小をどりしてずつかと切る。急所にかゝつてたまり得ず。うんとのつけに返る音。母は驚き戸を押あけ走り入つて押へだつ。由良も力彌もかけ出れば。九重は氣もいさみ。詞見給ひしか力彌さま母様。お主の恩を忘れぬ證據。だまして館の案内まで。地聞て置たと取まぜて。はけしき詞に。詞ヲ、でかしやつたさりながら。武家とはちがひ町方で。人を切ると跡のとがめ。そなたが切つたと言ふまいぞ。地母にまかしやと手負の傍。立寄て聲あらゝげ。地コレお侍。女の手腕の一刀。死ぬる程にも有まいに。倒れ伏て見ぐるしい。地おこしてやろと引起し。顔をながめてヤア。詞こなたは以前のつれ合。太田武大夫殿。娘よそちが爲には眞實の。地てゝ親じやが知らぬかと。いふに九重興さめて。詞我父とは。アノ本のとゝ様か。それは誠かははつと。地詞も出ずどうど伏し、途方にくれし涙なり。地力彌は年若見知らぬ共。由良之助は古傍輩目かとも強く。詞ヤア武大夫。汝十四年以前妻子をすて。奥女中をそびき連れ國遠したる不所存。改めもせず剩さへ横山が家來となり。我々が身持の善惡注進する犬の役。地思はず娘が手にかゝるも。古主小栗殿の御罰と思ひしつたるかと。恥しめられて手負はむつくと起直り。詞ヤアラ由良殿の仰共覺へず。某國を立のきし時分は。主君小栗殿は安穩。御切腹は昨日けふ。御目をかすめ女をつれ東國方へ立越。ふしぎにも横山殿に抱られ。小多文平と名をあらためそば近き奉公。然るに此度。何れもの身持を見出す。役目を受け都へ登り。本國の妻子が事を尋きくに。女房は七右衛門に下され。浪人の後娘を此所へ賣たとある。ハレ何とぞ苦患をすくひ。地餘所ながらも親子の名のりと思ひしに。所がらとて頭から客ていの挨拶。やうすを言はん折もなく首尾を見合す所に。詞娘は力彌殿へ執心かけとやかく口説と。横山か家來が身うけの相談。心底が知れぬと突はなされ。地ふびんや思ひにくれし體。願ひをかなへてやりたや。すいた夫を持せたやと。おもふも親の因果。詞つくく我身の上を考へ見れば。古主の敵横山に奉公するのみならず。ねらふ人を訴人の役目。犬といふがすぐに本名。とてもながらへ而も出されず。地惜からぬ命を娘にとらし。力彌殿の疑ひはらさ

せ。夫婦と成つてもらひたく。フシ斯は計らひ申せしぞや。地死ぬる形身に何をがな。娘が功に成事をと。思ひし折に屋敷のやうす。間ふを幸いづれもへ聞へるやうに語りしは。寸志ばかりの我進物。詞これを嫁入の荷物共。聲引出の引馬とも。思召れ下さるべし。地わかい時分は子の事も。思ひはからぬ色の道。さぞや憎しと思ふらん。ゆるしくてくれ女房と。しやくり上たる有様を。見るにわつと泣出し。わかれし時の腹立はくひつく程にも思ひしに。恨みつらみが苦みの。種になつたか悲しやと。フシ共に泣入る計なり。地娘はあるにも有ればこそ。をさなき時にわかれたる。父上ありと母様のつねづねに物がたり。たとへ見捨給へばとて紛れもないと様。それを敵と思ひつめ手にかければ何事ぞ。親殺し共悪人とも。名付やうなき我身のとが。ゆるさせ給へと伏しまろび。聲もをしまずくとき泣。大岸親子も諸共にフシ袂をしぼる斗なり。地稍あつて九重は涙をおさへ。せめての事に罪ほろぼし。共に冥途の御供と走り寄て拔取るさしぞへ。やがて武大夫もぎ取て。居なをると見へけるが。おのれが腹にぐつとつき立。背骨をかけて引廻す。是はと驚き女房娘。すがりつけば突のけく聲ふるひ。詞ヤア我をかばふて七右衛門へ。義理が立か孝が立か。地敵の家來に涙をかくるは主君の恩を忘れしかと。しかり付てヤア由良殿。詞只今めいどへ參つて。古主小栗殿へお目見へ申が。仰上らるゝ御用はなきかと。地いふに大岸。詞ヲ、幸なれども。天に口有り壁に耳。詞に出せば漏れやすし。油斷致さぬ心がけよく見て仰上られよと。地力彌にいひつけ最前に。うつし取つたる館の繪圖。押ひらは女房も。同じく繪圖を取出し。詞七右衛門がつま子共。御恩忘れぬ證據は是。地よう見て披露と差出せば。詞ヲ、てかした奇特。奇特。手ばしかし由良殿御親子。其通り御披露申さん氣遣ひあるな。地サアく爰は人目あり。我最期の場に居合せ。ふしぎ立ては御ため惡し。跡の事はお構なくいざお歸りとせり立れば。げに尤と由良親子なげきを餘所に見捨置。立わかるれば女房と娘は手負を介抱に。よろぼひ立て聲よはく。詞娘の事をお頼申。早くくるのは苦けんを助け。御子息と夫婦のむすび。地頼むくの詞にひかれ戻る大岸とゞまる力彌。詞氣遣ひ有るな

由良が嫁。しばしは廊に残す共お袋共に引取て。地貴殿のなき跡我々が此世をさらば弔ひ役。又の參會未來で。夫婦のかためことぶきと。由良は力彌が手をひけば。母は娘を引つれて。むかひ合せる蝶々の。羽がひ重ねの妹育な。舅姑嬬に嫁。へだつる跡は涙聲。さらば。く。さらばやの聲無常めく知死期時。果敢なくきへし死骸をば餘所に見なして大岸は山科さして立かへる。

第四 道行老の一ツ書

世のせわに。もつけといへど。中よきは。フシまふけ也けり。大岸が。ふるすに残す母千鳥嫁のおやなと諸共。ねぐら放れてたつか弓。腰にあづさの播磨瀉。しかまの浦より便船しなにはの。濱に月しろのあがるは。八つか。七浦の。名所を教へ姑の手をひく嫁がほうこ草。我男ぐさあるさきは。都のそらと詠めやり。フシしたひ行くこそフシ物うけれ。松はフシ目あての。一里づか子もりする子に物とへば。人の沙汰するさだの宮。フシ筆とる神と教ゆれば。老の思ひの一ツ書。しる人あらば言づけて我子の身持しづめたや。しづまざいかゞ伊賀が崎。和泉式部の言のはに。我はたゞ。風にのみこそ任せつれ。いかゞさきく。フシ又は行くらん。此身の上をよみしかと。思ひなやみて行先は。ひらにとまれのひらかたに。袖ひく下女が聲そろへ。歌めいば欲くはひらかた泊。夜は宵からのせてやる。こんこりきこまか。サアサのせてやろとフシロずさみ。うたふは爰ぞ其昔。駒の狩して頼政の。このした蔭を得たまひし所とやいふ眞木の山。いけづき取し大がきの。フシ名のみ残りて好ましや。我にも駒を得させなば。母君のせて口とりてつまの嬉しき逢ふ瀬をと。思ひわたるや天の川。フシそちの戀路になぞらへて。一とせぶりで自も。積る思ひをしつぽりと。語りあひたやフシ相の宿。煙草しんじよぞお茶まいれ。お腰かけよと小手まねく。是も御ゑんのはしなら。橋本村に橋かけて。我子や夫の有家まで。地渡してくれよ狐川人が迷はゞ我は猶つま子に

迷ふ心から。たれを恨の葛はすぎ。男やまぞと聞からに。ぬさ奉り柏手を。地うつゝ心に姑は誠をてらす神ならば。主のあだをば潔よう。我子にうたせ給はれと。フシ祈るもさすが親心。地獄のおやなも手を合せ夫の身の上取分て。一子力彌のりうつり本望とげさせ給はれと。子を思ふ身の一道は。フシ哀と神もしろしめす。フシ矢たけ心のふたり連女武者共いふしでの。神の力を頼にて。行先ながき流づゝみ。船ひく人のわる口は。こゝに限りず一筋の長きなは手を嫁そしり人ごと堤と名を付て。フシいひ習はすもひが事よ。いとしかわいひ子にそへば。憎うない憎いとほまがる心のしゆもく町。フシ木わたのさとを餘所に見て車道をばたどり行く。物うき思ひ山科の。里はいづくと尋れどまだ程遠く足弱の。あつさを凌ぐ便りなく。嫁がきてんの一すゝみ。老をやしなふ。松風はふらう伏見の藤の森しばしとしてこそ。三重休らひぬ酒は飲たし酒代はもたず。おさかばやしを見て通るもフシ世渡りに。地うき世をめぐる車押鳥羽より出て歸るさも。又とばかはと日暮まへ。暗の夜三八鼯の六とて。大八引の申間でも。名うてにうてし暴れ者。朝野稻荷の山かげに。フシ車のながへ突とばし。詞ヤイ鼯よ。めつたに早う往んだとて。うまひ事も有まいに。ゑいわいヤイやすめ。マア一ぶくせい。地ヲ、よからふと腰付の。天満久吉取出し。筒のなべずみ眞黒な煙草すば。詞イヤなんと暗の夜。半季にたつた五奴や七奴のちがひては。モウ大八引はあはぬ物じやぞへ。毎日毎日の積荷物。牛のかはりにぎうくと。目の出るほど働ひても。眼の明ぬ親方。やすめ共いはんぞいな。それにこちの山の神が。同じやうな握つこ。朝も晩もちんからいに。よばした斗の麥食。ぼつくとよまよひ言。夜も晝もアやかましい事じやないか。サアさればいいい。あんな奴等がこねるとな。車牛にうまれるげなはい。其時はこちとらが。ながへに掛てたゝき廻してやるはいやいと。地ちよつと寄てもかげ口は日比を。思ひやられたり。嬉しやけふぞ。夫や子に大岸由良の母女房。我は急ぐと思はねど心が。心いそがせて。はや行先も程近しいさめど知らぬ道筋を。問ま。ほしやとフシ歩み行く。地向ふにやすらふどら者の傍間近くも女房おやな。愛相らしく是申。詞おふたり

へ物問はふ。我々は遠國者。都の方はふ案内。北山科へはかふ参るか。地もう何程の道法ぞ教へてたべといふにうなづき。詞ア、爰から程はごはらぬ。誰が所へ行のじや。ちとらは一年中。山科へはいり込てゐる者共じや。何成其間にはれと。地つかふど聲も時の便り。老母は立寄是は。詞然らばついてにお尋申さん。其山科に浪人の。由良之助といふ人を。地いづれもお聞なされぬかと。聞てやみ夜引取て。詞ヲ、有共。大岸由良之助といふ大だはけ。内には見事な妻をおき。其うへがほつきたらいで。夜も晝も島原へ。ひつたりと酒づけ。ゆくときも戻る時も。足元はひよろ。そこら中は由良之助。是より外にはないでやすと。地聞より母親女房が。はつと斗にむなづかへ暫し。あきれて居たりしが。地母はおやなをかたへに呼び打しはれたる涙聲。今の咄しを聞やつたか。國元で聞たにちがはずゆくへも知らぬ下郎迄。かく淺ましき物がたり。御主の御恩を。フシわすれしか。地但しは天魔の見入れるかと。歎く詞に女房は。つらさはいとどまされ共老母の心をなだめんと。詞あの者共がうはさては。さふ思召筈なれと見ると聞との世の中。あれ程にも御さんすまい。地よし又身持が悪うてもおまへの遙々御いけんに。おのぼりなされた手前も有りお心も直らんと。とりなす内も心には。恨をふくむ目に。フシ涙。醜れかゝるぞ道理なる。地こなたに二人が身のうへを悔む間にあなたは。何やらひそくうなづき合。ずつと立てふたりが中押へだてたるどら者共。詞こなた衆は由良之助を尋るか。あんな馬鹿者まゝにさはれの。役にも立ぬ浪人を。尋廻る其手間で。身につく相談したがよい。ナア颯よ。ソレ。一日あるいてどこもかも草臥ても居られふし。地さすつて遣ふとじやれかゝれば。心のかたい。姑がむつとせり上臈はりかけ。聲はしたなくコリヤ慮外者。詞そこ退居らぬか下司めらと。地しかり付れば暗の夜はせゝら笑ひ。詞いか様はんに昔から譬にはづるゝ事はないはい。コリヤ颯よ。歌野でも山でも邪魔な物はおば。詞ハテ扱やみの夜。老ぼれ殿には此いたちがこつとり共言はしやせぬ。そちらで早う。ほめけ。と。地言はれて氣の付やみの夜三八。詞いなか者じやと言ははんすけど。京恥しいうまい盛り。一口くはずにおか

れぬ顔。我等が名はやみの夜とて。くらがり好なうまれ付。地ちよつと小陰へいざ／＼と。手を取れば女房おやな。下地のもや／＼した上にうるさく憎く腹も立ち。なんの己等一討に殺してやすく通らんと。懐刀に手をかけしが。若姑御にあやまちあらば孝行の道もかけ。夫にあふて言譯なしと。胸を押へて笑顔をつくり。地是は嬉しいお心ざし。わしらが様な女に。業平まさりのお前達。ほれたとあるは忝ない。さりながら今ではならぬ。大事の／＼急ぎの用。其用をしまふたら。戻りしなにはお二人のお家を尋て行ませう。地お所はどこ元ぞ違はないと當座の間に合ひ。老母は擬は嫁女が彼等をだます虚言と。心に合點見むきもやらず。いたちの六が笑ひ聲。詞コリヤやみの夜。だまくはされて蹴つまづくな。ようなふ暖かに其手はたべぬ。たべる物は外に有。ヤイチやつと片付て仕廻おれ。ひまが入なら己かはるか。イヤ／＼おれが仕まふて取ると。地會釋もなく引か／＼へ小陰へつれてかけ行を。叶はぬ所と女房が手は柔かに柔術のまつかう。うんとにつけに反かへる。詞シヤちこざいな女めと。地走りかゝる鮠の六母が跡よりひはらのあて身。フシ同じくかつばとまろびしが。地一度に起て兩方へつかみ付んとせし所を。母のおやなも懷中より氷の如くとき立し。よろひ通しを拔はなし。逆手に持て寄たらつくぞと聲かけられ。やみの夜いたち猫に追れしごとくにて。きよろ／＼色は眞青に。詞重々の不調法。こんなきついお人と知つたら何のてんかう申ましよ。地まつびら御免下されと。始に似ざるがた／＼振ひ。フシおかしくも又小氣味よし。地おやなは猶ほはり強く。詞大體な女と思ふか。ゆるす奴ではなけれ共。地こつちも急ぎの用有る身。重てをたしなめ去ながら。詞ゆるしてやる其代に。山科迄とつくりと。姑御を車に乗せ。地送つて行けと言はれて喫驚。詞エまだ三四里も往なねばならぬ。どふぞそれは御了簡と。地詫れどおやなも言ひが／＼。詞いやならつくが。アイ／＼と。地返事しながらふせう顔。母もすかさず聲をかけ。詞コレ／＼嫁女。送る事はいやなそふな。わる者の見せしめに。殺してしまやと振上れば。ア、お氣の短いおうまれ付。成程送つて参りましたよと。地頭をかき／＼つば／＼口。詞申。とてももの事に嫁御さまもお袋様と御一所に。お車へお

乗なされて下さりませと。地初の當身に體はうづく。手なみのこはさに追従たらん。そんならさふと嫁姑。フシ太
 義でござると乗うつれば。地二人はながへに手もかけず。詞エ、三八。わりや聞へぬぞよ。わけもない事言出して。
 いまゝしい歌實も取れぬしんどさすはい。ハレヤレ願よもふよいわい。逃て往んでは車をとらるゝ。地せふ事ない
 とへらず口。車の上より兩人がいそげゝとせり立れば。腹立ながら出ほうだい。歌ひよんな和郎らを。車にのせて。
 急げゝと言てせはる。てしよ様せふよがない。せふよがないと山科の山道さして。三重急ぎ行く。山城の山科邊の。
 山陰に。山か風呂かとなまめきしうす紅梅の色ふくむ。かよと名付て大岸が。妾じゆんたる派手者が。フシ鏡にうつ
 す。湯上りを。下女の小まんがおぐしをと。なてつけ髪の薄げしやう。油とりして。拭込し。顔もつやあり色有りて。
 見とれ姿ぞフシ好もしき。地せしるも下女が追従口。詞申おか上様。おまへさまの様な。うつくしい奥様を持て。且
 那様の悪性は毎日毎夜。けふも島原の振舞て東山へお出。定て大體のきげんで有るまい。同じ事若旦那力彌様のか
 た氣。地今も今とて奥庭で弓の稽古。御浪人の昔をわすれぬお心ざし。おいとしぼいと思ふから。詞思はず知らず後
 から。抱つかふと致しました。地ヲ、おはもじやとよしばめは。地かよも片頬に笑含み。詞若衆さかりの力彌殿。憎う
 ないも尤。親御由良之助様のお身持。御あけんもしたけれど。お國にれつきとした奥様有。地自妾のぶんざいで。
 おぬしは格別。御子息力彌殿の手前。たしなむ心の切なさ。推量しやと打とけて。しんく咄しのたそがれは。フシ
 いと辛氣ぞまさりける。フシ我子をしたふ。足引の。山科尋ね嫁姑。あゆみ惱みてやうゝと。庵間近くつきけれ
 ば。母は案内の先走り。ちと此家へ物問はふ。詞小栗殿の御家來。大岸由良之助殿といふ。浪人衆のやかたは是か。
 苦しうない者かくさず共。地名乗給へと有ければ。かよは二人の旅装それと悟りて成程々々。詞由良之助は此家。只
 今は留守なれ共。見うけし所がお國方。地若お袋様ではおはせずやと。問はれてこなたも胸おちつき。詞ヲ、目推量
 にちがはず母なり。又是なは嫁のおやな。地シテそもじは誰そと問ひながら。伴ひ給へば是は。詞適々ようこそ

／＼。それ力彌様よびませと。地下女がしらせと高聲がもれ聞へてや奥よりも。力彌は驚き走り出。コハばゞ様か母様かと。思はずしらず取付て嬉し涙にくれけるが。詞かくお出と知るならば。迎ひの用意も有べきに。地思ひがけなく御入は。いぶかしさよと尋れば。詞さればとよ。つれ合由良之助殿。傾城狂ひに氣をうばはれ。大事を忘れ給ふ由。地お袋様のお耳に入り。以の外なる御きげん。共々御みけん申さん爲俄にお供申せしと。聞内はつと思へども。詞いや／＼申。それは人の雜説。親人にかぎり。左様の義は候はずと。地とりなす詞を老母は打けし。詞ヤア僞るな。近き都の内てさへ。牛飼きこりの口のはに言ひ立らるゝ不行跡。地妾狂ひのさた迄も。隠がないぞあらそふなと。遠慮のないのは年寄のするどき詞聞つらさ。差出るかよは手をつかへ。詞人は目せばく口ひろく。針を劍に取なすせかい。親子御のお身持に。地悪敷事は侍らはずと。取なしいふを國の本妻。尻目にかけて。詞ムウおかよ殿といふ。お妾有と聞及びしはそもじよの。りん氣嫉妬てにくい共恨めしい共思はぬが。地身に望みある侍の。ほだしと成は聞へぬと。詞のはしに針涙。フシ迷惑身にぞあまりける。地力彌もとかふ返答にあぐみ果しが申母様。詞國元と違ひ爰はかり宅。はし近で高咄善惡共によろしからず。地追付父も戻られ密々にお咄。先々奥へいざばゞ様。お手取上んといたはれば。さすが老木のをれやすく。詞是嫁女。こなたも草臥まあござれと。地孫が手を取るうれしさに恨みも。憂さも打わすれ。伴ひ。一間に入にけり。地跡にはかよが氣の毒の思ひにくれし折からに。主の大岸由良之助。たそがれ時の醉まぎれ。きげんで戻るうたひ聲。ウタイ山寺の春の夕ぐれ。きて見れば入相のかねに。花ぞちりける。詞ハ、ハ、ハ、ハ。やすが教へた狂言まひ覺たぞ／＼。ホ、ウ。程なう我家は是でござる。是はくらい。まだ灯をともしぬか。扱ても蚊にいきあたるは。そこに居るはかよか。蚊にくはれて何してぞ。宵から蚊帳も釣られまい。小まんよ。蚊くすべをしておませ。蚊に喰はそより。地おれ喰をと。フシとんともたれてじやれかゝる。地かよは居直り是申。お國からお袋様。奥様を件ひお出。おまへのお身持を聞及び以の外成御きげん。マア酔のさめる迄高聲を遊ばすなど。い

ひなだむれば由良之助。ハツト思へど苦にもたず。詞何國元の母女房。あけんしに來られしとや。テモ不するなわろ
 取れぬ。土氣のはなれぬ遠國うまれ。やまひの神さま拂ひしと思ひの外な俄客。よい。馳走に。此山里の名物。
 けんぼう小紋の蚊をふるまひ。地慾してやらふと蚊くすべを。あぶぎ立れば蚊は奥へ。追ひま間は母の居間。廿四
 孝を引かへて。フシ始終不孝のしはざなり。地かゝる折節表のかた。手をくゝられし下男。啞か吃かは知らね共。た
 だウン。トこはづくり。差のぞいて大岸が顔見て内にづゝと入。懷おしへウン。とうめきが辭義やら會釋やら。
 かよは見るとよりコハ何者。いやしい奴とつき出すを。大岸やがて押とめ。詞こいつ此中。原郷右衛門が方にかゝへ
 し。啞。使に來たと覺たり。ハテ面白いやつよい慰み。よう來た。サア爰へと。地招けば合點ししよつてまた懷を
 つき出す。詞ムウ懷に狀が有といふ事か。兩手をくゝりしは子細有べし。地マア其狀を。懷へ手を入れて。引出
 す物は裸人形。詞コリヤなんじや。是は異な物と。地さすがの由良も慌れはて。フシ小首をなぐる計なり。地かよも
 慌れてそれはもし。啞殿の持あそびか。外に文はあらざるかと。懷袂へ手を入れてさがせば大岸。地ヤンも見ると
 及ばぬ。謎をかけたる此使。コリヤ面白いさつて見よふ。フウ先比郷右衛門に。妾の事を頼置しが。裸でも大事な
 いかと。裸人形おこしたか。但しは又裸百貫出せといふ事ではないか。地ハテどふがなと頭をやめて。胸をいた
 むる一思案。啞は身をもみ括られし。手先つき付け脊を差付。物は言れずウン。で。フシ有無のわかちも無りけり。
 地老母の仰承はり力彌は奥より立出て。父のまへに手をつかへ。詞國の御隠居母様を伴ひはる。御出。地奥に
 待兼御座候はや御出とせり立る。返答もなく由良之助。何思ひけんづゝと立て。力彌を立蹴にハツタト蹴たをし。扇
 の平骨ゑしやくなく。たゞき立ればコハいかにと。啞もうろ。かよは取付き。ノウおとましや。酒きげんがまだ醒
 ぬか。お袋様のお出有しが。左様にお腹が立事かと。引のくれば由良之助。子細あれ共うはとぼけ。しどなき體にて。
 詞ヤア忤め。古くさい母女房待て居るとは。それ程已は母が戀しいか。其ぶするな根性では。傾城町の大よせ。まさ

かの時の買論に。目さず女郎は手に入まい。思ふおてきと引組で。心中して死ぬる氣を。地なせ持おらぬたはけめと。武道の筋を色によせ。叱りつけ睨みつけ。詞や郷右方からのお使咄殿。さぞお待遠。はんじ物を判じ出し。お返し事申さんこなたへと。地招けば合點し引つれて一間にこそは入にけれ。地妾のかよは氣のどくさ其まゝ力彌を抱起し道の道たるお心から。詞父御の邪打擲の杖うらめしく思されん。地常はない事酒さげん。我子にするのふするの。傾城狂ひを教へる親。又と世界に有物か。若お袋様奥様のお耳へは入らざるか。其程が氣遣ひな自御さげん同はん。何事も親孝行了簡あれと言ひなだめ。底の心はしらはりのフシふすま押あけ入にけり。地力彌はあたり見廻して。詞誠や連判の折から。母の繪姿手にかけて。此世で對面致さじと。誓しを早わすれ。地お出を嬉しく知らせし故こらしめの爲父の打擲。詞ハツア過つたりそふじや。傾城狂ひに事よせ。敵へ入込む軍慮の教。地慈悲心の有がたさと。ふし拜み。奥を見やれば以前の咄。返事を取てかへる體。合點のゆかぬ眼ざし。使の様子も子細ぞあらん。伺ひ見んと勝手口。のれんの蔭へ立忍びフシ息をつめたる其内に。地兩手をくゝられ咄囀表間近く出けるが。妾のかよが湯上りに遣ひなをせし姿見に。我身の影のうつるに氣づき。立留てあたりを見廻しどつかと座し。さいたる脇指足りびて鐙もと抜かけ。括りし兩手の細切ほどき。兩肌ぬいですつくと立鏡にうつし。脊中の文字を讀下せば。詞何々今宵いづれも傾國へ思ひ立の由。我々親子も忍びたち行き。かの地にて御參會申すべく候。郷右衛門様御報由良よりと。地讀むもぼつ。聞へる文章。力彌は様子つくつと見届け。こいつ下郎に似合ぬ仕かた。さては敵の犬なるか。目に物見せんとぬき刀。うかゞ居とは夢にも知らず。奥を目がけて差足し。切こむ所をつけゆく力彌。思ひがけなく引組でぐつと突込む馬手の横腹。無念々々咄の大聲。かくと聞より父の大岸。驚き奥よりかけ出れば。力彌は手負を下に引すへ。詞こいつ正しく敵横山が家來。咄囀のにせ者。殊に奥へ切込むつさう。地かく計らひ候と言ひもあへぬに由良之助。詞ヲ、でかしたり去ながら。そいつ敵の方よりも犬に入たるにせ者とは。郷右衛門も某も。

さとつてわざと召抱。我々が身持の放埒を。彼めに内通させなば。敵の油断は味方の十ぶん。今日使の裸人形。使を裸にして見よと。悟るにたはがす背に一筆。今宵いづれも傾國へ赴くとは。連判の面々關東へ討立とのしらせ。我々も是よりすぐ旅立せん。地幸々門出の血祭。急いでとどめと聞より力彌。えぐりし刀拔んとすれば。ヤレ暫らくと最期の手負。起なほつて息をつぎ。調叔は郷右衛門にも貴方にも。傾城狂ひの放埒は。敵をはかる拵事にて有けるよな。某まつたく敵の廻し者にあらず。同じ小栗殿の家來。早野七郎大夫の忤。同苗勘平家次といふ者と。地聞て大岸叔は古傍輩の二子か。調其身が又何故に。啞聲のにせ者と成。郷右衛門や某をたばかりしは如何に。ホヲ御ふしんは尤。某主君のあたを報ぜん爲。先達て横山が館へ入込。命にかけて働かし共。討事は擬置女房まで其場にて討れ。我は寺澤七右衛門が情にて。命からく逃のきし。是何故ぞ貴殿達をおそれ。横山油断せざる故。其おそる程の功も有るか。主君の仇を報ずる所存も有るか。地啞聲と成てうかゞひ見れば。郷右衛門も貴殿も。傾城狂ひに身持放埒。調今日の使は密事とは見へ我背に書遺す。シヤ是こそ。本心顯す文通と鏡にうつし見るに。やつはり變らぬ傾城町へ出合の文章。亡君の恩も思はぬ知行ぬす人。横山より彼めらを討てしまふがよき追善。第一敵を討じやまと思ひ。近寄てだての偽頭。地我はばけたと思へども尾先あらはす若狐。人を疑ひ身のうへを辨へざるも運のつき。情なや淺ましやと。拳を握り牙をかみ。男泣にぞ泣きあたる。地始終を聞て由良之助。調ホヲ、驚入つたる忠心。左様共存せず疎忽の至り残念至極。地せめて最後の思ひ出に。めいどの主君へ感狀の。みやげ致さんそれれ力彌頑箱。はつと答へて床の間の。硯出せば由良之助。懷中より連判狀取出し。調きたいの功臣早野七郎大夫が一子。同名勘平家次と巻頭に書し。地血判めされと差出せば。臨終の眼勘平が。よみくだして押いたどき。調アア有がたや。我名斗か父が名迄。印し給へば横山を討たも同然。地未來の爲にはよき土産。血判致し申さんと。流れし血をば染付けく差出し。調サア本望は達したり。地御親子共におさらばと刀を我と逆手に持。えいうんくくとぬき捨

る。心の功はあつけれど。うすき運命力なく。フシ終にはかなく成にけり。地由良之助聲をほそめ。詞サア〜力彌。いづれも今宵の發足おそ成てはいかど。母女房に對面せは心もおくれ互に引るゝ後髪。汝とても其の通り。地まづ此死骸をかくさんと疊引上ねだこぢ放し。死骸押こめ跡つくるひ。フシつたひし血をば拭流す。地血汐の雨は母女房。妾のかよも一間にて。子細を聞て立出るを。老母の教訓せひなくも襖のこなたに三人は。隠れたゝすみ餘所なから。フシ暇乞にぞ袖しぼる。地力彌は父の氣をおそれ母の事をいひ出さず。由良之助は我子に恥ぢ。心にかゝれど老母の事。いひかねて居たりしが。詞ヤア力彌。武道のいさめに親の事。制するも是迄ぞ。いはど一生此世の別れ。顔見るこそ未練のたね。地餘所ながらのいとま乞。某も御考母へ。汝も母へと指圖嬉しく。力彌はやがて奥の間へ。さし向ひ涙をうかめ。詞ばゝ様母様。父上の仰おもき故。お顔も見ずにお別れを。地是から申侍ふぞや。わけて母様たしなみの深きに迷ひ片ときも。忘れかねたる未練さを。父の御いけん身にこたへ。親子の縁を切たるしるし。勿體なくも繪姿を切し天罰ゆるして給べ。是ばかり心に懸り悲しさは。文にも筆にも盡されず。ばゝ様は武士の道。男まさりのお心。たゞ母さまのお歎きが。思ひやられて侍ふと。いふ内も早せき上て。わつと歎けば此方にも。息をつめたる三人が。身をふるはしてしやくり泣。フシことほり。とこそ見へにけれ。地由良之助も涙にくれ。詞ヲ、汝がきりし繪姿は。繪そら事ともゆるし有。某は現在に御老體のはるゝと。海山越て御入を。對面も申さず剩さへ。口にまかせて不孝の惡口。地ゆるさせ給へ武士の家國親子を忘るゝは。武門の掟て候と。詫する冥土は天命と。思へどすぐに襖の内。暗き燈火かけかくす妻や妾はこたへかね。出んとすれば母親が。門出の邪魔と押留る。亂れ心に亂れ足おし合せり合しきりの襖。めつきりぐはつたり行燈のうへ。燈火消てぐはらゝの。音に驚き親子共。立忍べば此方の三人。走り出事は出たれ共。有明きへて残る火は蚊遣火ばかり。ちらゝとしん夜の闇に。レシ異ならず。詞老母は聲あひ。ノウ見られたか二人の内儀。そなた衆より此ばゝが。名残をしいは如何斗。天是をゆるし給はず。自然と消し燈

火は。地逢ふて未練を起さすなとしめし給ふと知らざるか。詞敵横山討おふせ。腹切たりと聞ならば。めいゝ自害といひ合す。地さすれば暫しの別せや。とは言へ一人の孫や子が。討死に行く門出に。詞もかはさず顔も見ず。さらば共言はれぬは。武家の掟か是非なやと。かこち給へば女房も。妾のかよも諸共に。恩愛妹背はふり切とも。せめて別れに互の顔。見たや見せたや懐しやと。くどき敷けばさすが又。由良も力彌もフシ立かねて心の内の暇乞。地老母がやがて酔りし火鉢かゝへて押直し。詞やはや親子は行つらん。討死の身は立日が命日。たが身のうへも鳥邊野の。煙と思ひ定めたる。此火鉢こそ香盤よ。おが屑則洗五種香。無常のたねと。フシ取くべる。フシ煙にむせぶ。共涙せめて此火に影うつる。母の御顔見まほしと由良も力彌も立よれば。若やそれかと母女房。妾のかよも差寄て。けふりを中に隔の垣焦れ。焦るゝ折も折。思ひ懸なく蚊くすべのぼつと燃立蚊やり火は互のわかれ互の顔。はつと見合す。佛は死ぬる末期の一雫。ノウ是暫しといふ内に。又ふく風にフシ打けて。地元の闇路の旅立や。會ふは別れの涙雨。逢ぬは死のもと死出の旅。あづまの旅に行親子。跡に母親妻二人見送る内も外も闇。心の闇に聲くもり。なごりの詞耳にふれ。子が止まれが父親が。制しながらも歩みかね。嫁や妾がかけるを。母が押へて柳になり。桶になる身も樋をぬけて。飛出る袂引とむる。糸の亂れや結ばれし。思ひを見捨て兩人は東路さして急ぎ行く。

第 五

地口には蜜の甘きを吐き。心に突れる針をふくみ。人をそこない己を樂しむ。横山郡司信久が桐が谷の館には。めぐりに高堀かけくらべ夜廻りの聲拍子木の。すき間もあらぬ用害に忠功武勇の小栗が郎等。心をくつし氣もめいり今ではねらふ人なしと。聞より横山油斷を生じ癖のおごりの歡樂は。フシ運の末とぞ聞へけり。地既に其夜も子の刻過。小栗判官兼氏の家臣。大岸由良之助親子が忠誠。是を守つて一味の勇士四十餘人。義を金銭より堅くして命は泉

下の君になげ。討死を一戦に。思ひ立たる出立は。甲頭巾に眉ふかく。めんく背に金の短冊。姓名を書印しゑものゝ道具を横たゆれば。地中にも堀江彌五郎は。由良之助が智略によつて八尺斗の大竹に。弦をかけた大弓を四五挺斗ふりかたげ。いさみに勇み横山が。門外近く押よせたり。同じ出立に向ふよりすゝみ來るは郷右衛門。地すかし見るより由良之助。岡ヤア郷右殿。今覺寺澤が知らせによつて。今宵茶の湯振舞の跡へ討入申さんと。かく迄は攻よせしが。地時こそよけれあれ御覽せ。詞人静まつてせい氣は洗みだつ氣かみを覆へり。地敵軍も辰巳に向ひし故裏門より寺澤に。味方の勢を入れさせん爲。詞小野寺惣内吉田の左衛門。此兩人を頭として。若殿原を相添へ搦手へ廻したり。地此手は某親子を始おのゝ共に討入る合點と。詞より原がいさめば。皆我さきにと若者共。フシすは乗入れとひしめくにぞ。地由良之助聲をかけ。岡ヤア早まられな言ふこと有。夜討の大事は奇正のへん。敵を明りにおびき出し味方は暗みを小楯に取れ。女わらべに手に負せそ。天下を恐るゝ敵討。地火の用心に心を付て驚馬を放さすな。折々に合圖の笛吹合せ。敵に中を割らるゝな。名乗つて勢を引まといフシ相討をつねとして。地味方討すな同士討すな。相詞も三度にかへ。詞乗込む時は山かかね。軍になつては花か海。のく時は川か月。地向ふ者は討て捨にくる敵を追かけて。罪つくりに暇どるな。詞取べき首は只一ツ。進むにも退くにも。味方の印をほんにせよ。地用意がよくは攻寄よと手組を揃へしとくしとくしと詰よせて。地時分はよしと大鷲傳五。原郷右衛門が肩さき踏へ。フシ堀の上に跳上り。地雪のあかりにとつくと見すまし。表門のくわんの木にも肉より錠をかためたり。詞かけやくと呼立れば。地まつかせと味方の若者。かけやを引さげ立向ふ折こそあれ。まだ用心の内なれば山形兵衛は夜廻り役。拍子木打て来る音。是幸と大鷲傳五ひらりと内へ飛込んで。山形兵衛が眞向をまつ二ツにぶち放し。拍子木おつとりけはしげに。内よりうてば外よりも音に合してかけやを振上。どうくくく打音に。くわんの木中よりほつきと折れ。とびら微塵に打くだかれフシ大門さつとぞ開ける。地大將大岸由良之助一番にをどり入り。忍

びたいまつ差上て内の様子を見廻し。岡山と一聲かけければ。地かねと答へて一同に我も我もと込入しが。つまりは戸をしめて内より錠をおろしたり。たゞき割らば目をさまし敵に先を取られんと。かねて期したるはかりごと。地大鷲傳五郷右衛門。大竹の弓四五挺戸口戸口の敷居鴨居。しつかと食せ手を揃へ。弓弦を一度に切はなせば。大竹に彈かれて鴨居を四五寸持上られ。やり戸つま戸はばらりとフシ將基倒しと成にけり。地大岸親子すき間もな縁の上へかけ上り。勢ひこふて大聲あげ。岡小栗判官兼氏が家臣大岸由良の助利雄同力彌利金。此外忠義の武士四十餘人。亡君のあだを報せん爲押せたり。地横山殿の御首を給はらんと呼はつて。數多の勢を引従へ。フシ一文字に切入れば。すはや夜討と混亂し。地宵の茶の湯の茶せん髪寝とぼけ顔に素肌武者。フシ太刀よ鎌よとひしめいた。フシ小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者。岡祕術を盡せば由良の助。餘の者に日な懸そ。地只横山を討取れと。八方に下知をなしもみ立採立へ戦ふたり。地北隣は佐々木將監友秀。南隣は石堂右馬之助。兩屋敷より何事かと屋根の棟に武士を上。提灯星のごとくに軍兵やねより聲をかけ。岡御屋敷さわがしく候は。狼藉者が盜賊か。但しは非常の沙汰候か承りとゞけ。地御加勢申せと主人がいひ付。フシ仔細いかに尋れば。地大鷲傳五郷右衛門。左右に別れて詞をそろへ。岡是は小栗判官兼氏が家来共。主君のあだを報せん爲切入候。天下へ對する狼藉にても候はず。元より佐々木殿。石堂殿へ何の遺恨も候はねばそつじ致さんやうも無し。地火の用心かたく申付候へば是以氣遣ひなし。たゞ穩便に拾おかれ候へ。岡それとも是非御加勢と候へば。力なく一矢仕らんと高聲に申にぞ。地兩家の人人は是を聞き神妙々々。岡弓矢取身は相互。我人主人持たる身は尤かくこそ有べけれ。地御用あらば承らんと。フシ鳴をしづめて入にけり。地こなたの館は大勢が一時餘りの戦ひに。よせ手はわづか三人薄手をおふたる斗なり。由良の助相圖の笛。ふき立く味方のせい。一所にあつめてせいたる顔色。岡年月心をくだきは横山を討ん爲。彼奴が寢間を見とゞけしに。夜着ふとんを引ちらし枕斗は残りしが。地此寒夜にひえもせずふとんの上的のあたゝか。

さ。寢間をぬけ出しに間もあるまじ。調あの水門の箱樋こそ心にくし。うちより水を流しかけ。そとへ廻つてうかどひ見よ。地内に人の有なしは水の流でしるべきぞ。心得たりと大岸力彌。郷右衛門諸共に。フシ外へ廻つて待かくれば。地大鷲傳五内よりも。用水をどうくんと汲入れ汲入ながせ共。みな口われて滴りの。跡へあまつておち口はフシ岩にせかるゝ如くなり。調サア人あるに極つたり。鑓を入れてさがせやと。地原郷右衛門を始として手にく鑓をつき込みくかり立てば。たまり兼て出る侍。調私は土川兵庫。振舞のあげく泊り合して此仕合。地ノウお助け下されとはひ廻る。大岸力彌走り寄。調先年殿中けんくわの節。主人小栗判官の。地横山を討もらされしも。こいつ故と聞及ぶ。地横山が先がけせいと。首討おとせば紅の。フシ血汐の樋とぞながれける。地由良之助大音上。調是程迄仕負せて横山を討もらす。地よつく天道に捨られたる我々。すごく歸つて死なんより。此所にて腹かき切り四十五人のをん念。悪れうとなつて横山を。取殺さんと思ふは如何にと傍をきつと見廻せは。力彌を始原風間。いづれも左様に存ずれば。我々さきに仕らんとフシ既にかうよと見へたる所に。地おくればせに寺澤七右衛門。大息ついでかけ來り。調某兼て知たる案内。すみく迄捜せしが。いまだあれ成柴部屋を改めず。今一詮議と言ければ。地皆々はつと心付けに尤と小屋の戸に。我もくと手をかけて。あいやつと引はなせば。内にかくれし横山郡司。コハ叶はじと炭薪。ばらりくとなげ出すを。餘さじものと大鷲傳五無二無三に飛入り。取ておさへ聲をかけ。調横山郡司信久を。大鷲傳五組留たりと呼はれは。地由良の助を始として四十餘人がまん中に。横山を追取まき聲々にのゝしりて。調妻を捨子にわかれ。老たる親を失ひしも此首一ツ討ん爲。地けふはいか成吉日ぞ浮木に逢たる盲龜は是。三千年のうどんげの。花を見たりや嬉しやとをどり上り飛上り。首討落し聲を上。扇をひらき舞うたふ悦びの聲とよきの聲君が代祝ふ萬々歳治る御代こそめてたけれ。